

井筒業平河内通

近松門左衛門作

むむかし〜昔は昔の今日にして。更に昔よりの昔にあらす。夏は股の昔股は周の昔。其の昔の禮によりて損益する所を知らば。百萬代の末かけて。天地と共に限なく。變らぬむかし久堅の天津御位五十六代。清和の帝の御兄。四品惟喬親王とて。オロシへ通世の皇子。いまそかりける。地頃は貞觀十五年二月始つた。御乳母の由有りて伴の大納言宗岡。御外戚の親み散位紀の有常。日枝の山の麓。フシ小野の。閑居に伺候ある。フシまた山里は。冴返り。フシ雪はこほすが如くにて。地無媒の崖路を埋み。雪凝つて盤石頭に轉てり。人家の煙道絶えて朝來。一片の霞を呑むとは。かゝる所のフシ山居かや。吹雪にまじる勤行の鈴の聲をしるべにて。室の戸に案内すれば。スエテ

蘆の簾押しやりて。地立出で給ふ惟喬親王。香の煙にふすほりし麻の衣赤木の數珠。行ひ入りたる御形珍し。方々。公の事繁きに雪踏み分けし音づれば。鷹が爲の梅鶯山家の春を迎へたり。隠遁者のもてなしと。地幄を掲ぐる佛壇に。一連一具の骸骨頭に冠手には笏。小葵の袍引きまつひ。もも是を誰とか思ふ。鷹が外戚の祖父有常が爲には父。正三位紀の名虎の骸骨と。地仰も果てぬに有常驚き怪しくも悲しくもあつと烏帽子を簀子に着け。スエテ心迷ひて見えければ。調、白骨を安置せしいはれ。大納言は知つたれども有常はよも知るまじ語つて聞かせん。事新しきいひごと乍ら。今の帝惟仁は第二の宮にて弟。鷹は文德帝第一の宮。位に即べくき理運と但の名虎心

身を碎きしこと。惟喬惟仁位争ひと秋津島に隠れなし。名虎は大力弓馬の達者なりしかど。天の時至らず。競馬相撲の勝負に負け終に無念の此の世を去る。地あつばれ其の時争勝ち我十善の位に即かば。名虎を搦政關白有常も任槐。宗岡を大將にもなすべ。つしをと。思ひ悔むに其のかひなく。名虎に恩を報ぜん爲墓を掲ぎ骸骨をつらね。私に正一位大政大臣を贈り。魂を呼返す招魂の祭をなすも。恩を報するばかりぞやと。調語り給へば有常父を慕ひ親王の御心。忝く顔をもあけず。フシ直垂の袖は。涙に凍りけり。地大納言進み寄り。調かゝる御仁心の徳によつて御運開事。此の扇の開くが如くと祝ひ奉り。當代の繪師百濟の河成が筆。地繪を御賞翫候へと。扇三本献上す。親王御感斜ならず一々開き御覽あるに。山水花鳥の類にあらす三本に三人の美女の姿。調ハア、ア、美しや〜と。地御目も消え〜しみ入るばかり。墨の衣は

忽にファッションに染
 めたる戀衣。地思
 ひこがれし御聲に
 て。調書きも畫い
 たり異國の楊貴妃
 我が朝の衣通姫。
 扇の上に来りしか
 。地かゝる女も有
 る世ならば。遁世
 はすまじいもの繪
 そらごとか但し。
 寫し留めたる人ば
 し有るかと思へば
 。調書知ろし召さ
 ずや。今の世日本
 の三美人と。及ぶ
 も及ばぬも戀慕ふ
 は此の三人。地柳
 の五ッ衣に紅の
 袴繪扇がさせしは。



中納言藤原の長
 良が娘高子の君。
 當今清和天皇の女
 御に定り。未だ入
 内なき先に二條の
 后と號し。色好み
 の業平が案内にて
 童の踏明けたる
 築地の崩れより。
 帝忍びくゝに行幸
 ある程の美人。地
 又井筒に水鏡見る
 姿は外にもあらず。
 則ち有常の息女
 井筒の前。在原業
 平に縁組とかや。
 委細は親父に御
 尋ね。又欄干に
 寄つて山の月詠む
 るは。地河内の國



高安左衛門が娘伊駒の姫。日本廣しと申せども美女と申すは此の三人。詞叶はぬ戀とは我等體の上。天子の御身にて人の妻とも普天の下に住む者。地勅説は背かれず御心一つにて。今でも天子とならるゝ御身。何思召す事候と勸むる色は謀反の妹。有常はつと肝にこたへ南無三寶。詞毒氣を吹込む魔王何條佞臣め。地言ひ破つてくれんと腕をもみ膝立直し向ひしが。親王は扇の繪頭に當てつ抱き締めつ。宗岡が辯舌に聞入りたまふ御氣色。いやくなまじひの諫言だて。却つて娘井筒を上げよなど無體を請けては難儀。時節悪しと分別極め。大内の勤事繁し先づお暇と申せども。地さらばとだにも宣はず。大納言を後目にか

も道行はれずといへり。正直は阿呆の異名。かねて汝に示す如く名虎無くては本望は達けられず。地僧正眞雅が傳授招魂の法。今日百日の満願いで一祈りと壇に臨み。獨鈷三鈷鈴錫杖。オクリ此の幣。帛に打乗つて。地名虎が魄魂呼子どり鳴くをしるるべにコハリ招魂の法。去職還來教王經歸り來れ歸り來れ。抑東方には千仞の長人。魂を鏢す事恐るべし南方には蠅蛇。秦々として人を呑む。西方には赤き蟻象の如く。地立蜂瓢の如く其の土人をコハリ爛す。北方には氷の山岷々として雪の淵。フシ千里なり。フシ天に八重雲九重の。虎の關豹の。コハリ關。地下には土伯の三眼角鬚々たり。天地四方にとまらず元の體に歸り來れ入り來れ。空風水火の五輪五行に五大符。八大童子は地八職の。オクリ道を。導く六地蔵は六根に加被を。コハリなし。擁護を加へ今爰に紀の名虎。再來せしめ給へやと金剛。安立の印を結んでせめかけ。祈請有り。

フシ祭文經文。地鈴の聲日枝の嶺嵐雪おろし。谷の嵐を吹上げ吹巻きとくくく。まつと棚引く燒香は。反魂香の煙の中白骨動くと見えけるが。眼耳鼻舌明々と。野髮生じ皮肉手足具つて。忽ち人體連續すれば陰陽の氣貫通し。壇をひらりと飛下り一揖して立つたりし。フシ祕密の法ぞ不思議なる。地昔に變らぬ大音聲。ア、あかやかく明るやな。無念の魂幽冥の暗闇より。婆婆に歸つて本の名虎。清和天皇を追ッ下し君を南面の位に即け。二條の后を女御に立てん事日を數へて待ち給へ。地心の勇氣腕脛の力。前生に百倍と片足ちつと踏伸はせば。查股の大石かつぱと踏返され。谷底千仞とたくくどうと響き打つたる山彦は。フシ雪にこたへて夥し。訓誡や天皇は二條の后の入内を待ちかね。築地の崩れより忍ばるる由。通路に人を伏せて惱し。忍びの者を以て后を奪ひ取り。地親王は托鉢修行と欺き大内に推參し。無理難題を云ひかけ否

と勅説あらんは必定。それを味方の詞質（ことばのしつ）跡は名虎に任せ置け都遠くて叶ふまじ。洛陽（らくやう）烏丸の古御所へ密に移し奉れ。宗岡やつと既に下山の用意有り。上求菩提（じゆうぼだい）下化衆生（げかじゆうじやう）佛を學ぶ雪山の。修行を今の一ツ時に。碎（くだ）く。小野の山跡しら。雪ぞ三度へ降りにける。フシ東五條に。地棟（ぢどう）高き二條の後の御里御所。いつの間にやら童（わらわ）のちよつと築地の塵泥（ちりひじ）を。一寸二寸五六寸。郡一ツばい踏み廣げ。オトリ今は。惟仁親王の御通路（みち）と名に廣く。フシ淨名とめよと關守の。打ちも寝ならで寝ずの番。フシ夜晝（よるひら）厳しく守りける。地音に聞えし色好み在原中將業平朝臣（あそ）。郎黨（らうたう）般若五郎仲則を召具し。常々君の御供して通ひ馴れたる築地の崩れ。立寄ればこはいかに。數多の仕丁座を列べ用心厳しく守る體。案に相違し給へども般若五郎に目くばせし。築地を越したる梅が枝の。花見る體にもてなして。フシ行きつ戻りつ休ちへば。地番の者ども聲々に。調立つまい

くお通りやれ。お通りやれと寄せ付けず。木で鼻こくる男ども。フシ梅ばかりこそ色香なれ。地業平五郎をかたへに招き。調取沙汰に違ひなく。惟喬親王の業と覺えたり。後の父中納言長良は老病心物の情知つたる人。伴の大納言宗岡が我意に任せ。番を付けしに疑ひなし。地如何はせんと宣へばもとより無意氣強力の般若五郎。調惟喬でも騎（また）でも何の事。旦那私の戀ではなし。勅説を蒙り給ふ上番で有らうが關守で有らうが。片端つまみのける分。地いざ御出でと駈出す。調ヤレ待て五郎。其の勅説云はぬ事。入内の儀式相濟み后内裏へ入り給へば。平人の夫婦同然戀も情もいらねども。地君待ちかねさせ給ひかゝる築地の崩れより。十善天子の徒跣（たはし）の忍路。其の媒は業平無骨の振舞末代の笑草。調業平は梅花一枝所望と表門より紛れ入らん。汝は番の者賺し除けよ。其の内に后を誘ひ此の所より忍び出で。地直に内裏へ入れ申さん必ず荒

氣出すまいと鎖めて。フシ別れ給ひける。地般若五郎分別し番のあたり腰かゞめ。行戻り立戻り用有りけの體を見て。調コリヤお侍俯向いて鼻をひこくと。此の街道が臭い。早く通つた。御尤々々。たつた今此所で革袋を落いた。内に金子三十兩細金が一握と。地いふより番衆目の色變り。役目も番も打忘れ。あたりほとりをころくと。フシ大地を臭いで廻りしが。サアしてやつたと般若五郎。調ハア、思ひ出した。何某の院の櫻の下。うつかりと物を見て居たが。地其の時落したと。地聞くより番人我先と。落さぬ金を拾ふとてフシ魂落して走り行く。地窺ふ隙間の斑犬聲をも立てず背を伏せて。築地の穴より入らんとす。地シヤ知れたり。犬めと立隔て。睨み付くれば犬も尾を立てじりくく。引けばつゞき。のけばかゝり。付けつ廻しつ二三通しさつて土掻き肥をむき。呻るばかりに吠えもせず我が身を庇ふ有様は。丈拔群に立伸びて常に勝れし

大犬。ヤア心得ず一つかみと飛んで懸れば早速を踏み。築地の内へ駆入りしは、フシ翼の有るが如くなり。ハアテづ無う喰ひ肥えた野犬め。あつたら骨折り草臥た。番番の者の歸らぬ内主人は御出でなされぬかと。内を見やつて待つ所に。館の内騒しく一犬吠ゆれば萬犬の。聲頻りに内よりも業平後に負ひ参らせ。築地を潜りに忍指後は夢にもしら玉か。何ぞと咎む犬の聲露と答へて消えぬべく。フシ姿しをれて出で給ふ。仲則念度見。ヤア最前の野犬めと尾筒を取つて引戻し。むんずと抱いて押伏せ。サア忍路の犬仕止めた早う〜と呼ばれば。地中將今は心安し。跡より追付け仲則と、フシ大内指して急がる。地敷かれながらびやう〜わん〜跳ね返さんと身をものがげば。ヤア無用の長吠と面の皮引きめくれば。三十斗りの鬘男。頭斗りが大男五郎かつらかつらと笑ひ。おのれが面見知つた。仲の大納言が冢來一藤太基國。音に聞いた忍びの

上手。犬になつたは仔細が有らう。サアぬかせ。ぬかせ〜ときめ付くれば。ヲ、仔細無うて犬の皮被るものか。后を奪ひ取らんため。地口惜しい小刀でも持つたならば。下よりぐつと突かんもの無念々々ともむ所を咽喉うんと一ひねり、フシぎやつとはかりに息絶ゆる。番番の者ども立歸り。エ、憎い何にも無いもの嘘つき奴。ハア、見ごとな番の衆。落したと云ふはうその皮のたん袋。左程革袋が拾ひたくば。似合う様に犬ひらひ。此の革袋拾ひをれ。馬鹿な面の革袋と笑うて。こそは、三重、行雲の。地春の日敷も二月の涅槃供養の音楽と。御垣が内の絲竹に雲井の外も聲すむ折から。大の法師糞掃衣の高からけ。鐵鉢擗け。錫杖つき郁芳門をつ〜と通り。當番の馬部吉上御遊の折から。何處の坊主罷出でよ咎むれば。地耳にも更に聞入れず御階のものと突立ち。十方且那の福田。宿植徳本の沙門に齋料。地はつち〜と大音聲、フシ

管絃の調子も亂れけり。諸卿の老幼あれこそ惟番法規王帝の兄君。御運強ければ御位に即かせ給ふお身。八つ目草鞋の徒既。愚痴無智のはつち坊主同然の御修行。我々が着飾る綾錦は却つて地獄の種と成る。地あのお姿が直ぐに佛の三十二相。八十種好も外にない。ア、御殊勝や有難やと手ンでに黄金名香名珠。手向け給へと御鉢に投げ。皆南無阿彌陀とひれふして、フシ圍繞渴仰申しける。地親王施物をくわらりと投捨てあさましや凡夫身。金銀珠玉は今生一世の寶。却つて人を迷はず地獄の導きとは此の事。されば經には頭目髓腦と説き。又は相控國位僕從妻子とて。古へ異國の大王は佛法の爲に眼をくり。五體の筋を抜き王位を捨て妻子を捨て。法に歸服したる例有り。雑人の施物受ければ内裏へ来るには及ばず。今日の施主は清和天皇手づからの志。はつち〜といひ捨て空嘯いてぞ居たりける。仲の大納言横手を打ち。ハア、御尤々々。

一ツは御祈禱且は結縁、出御有るべしと奏すれば。天皇御階近く出でさせ給ひ。こはそも殊勝の御有様、朕不思議に位に即くと雖も。和上は兄族は弟、もとは文徳の一ツ木末に連る枝。佛法不思議王對座とて佛の像に成り給へば。王位とても憚りなし御望だに候はゞ。爾たとへ七堂伽藍なりとも建立し參らせん。金銀の施物を抛ち給ふ無欲の程。地實にや金は山に捨て玉は淵に投ぐべしと。聖賢の詞に叶ふ御心の清らかさ。感ずるに飽足らずと。御冠の巾子を傾けて御手を合させ給ひける。フシ御有様ぞ忝き。地心を合し大納言折よしとつと出て。爾これく勅詔に異議はない。七堂伽藍建立の御望か。イヤ僧正僧都の位が望か。イヤ。然らば知行の御所望か。イヤ經文の通り國城妻子が所望。大納言打領きム、妻子を施物に施せとは。扱は二條の后を御所望か。地ヲ、何も入らぬ二條の后。高子の君をはつちくと呼ばはつたり。地天皇大

きに驚き給ひ。扱はきやつ賣主坊主案に相違と勅答なく。立つて入らんとし給へば宗岡飛びかかり。御衣の裔しつかと取り。望を叶へんとたつた今の論言。天子に一言なしと引きとむる。惟番入道錫杖取直し。后を奪ひ取るは易けれども。おのれが縁を切らずんば。賢女立てして我が心に従ふまじと思ふての斷り。地サア后と縁切るといふ一言聞かずば。錫杖のむね打と。傍若無人の有様既に危く。フシ見えたる折ふし。地散位紀の有常執權柱金吾廣國を召具し。來るより早く天皇をもぎはなし。奥へ押しやり奉り。地先度北山にて兩人の眼色唯事ならずと心を付け。まつかう有らうと思ひしと。親王の宮のと察むるも君臣の道を守る故。我が姉の腹より出でた正しく甥なれども。頭を下け腰を屈めてくやしい。地か、る無道の惡僧鉢閑の乞食坊主。アレ金吾引きずり出せ意地張らば打殺せ。承ると廣國錫杖もぎ取り振上げんとする所を大納言

かけ隔て。錫杖の柄をしつかと取り。コリヤ。地下司奴。一天の君さへ敬ひ給ふ惟番親王。主が物に狂へばとておのれ迄が此の錫杖振上げてなんとする。地まつ斯うすると引つたくり今日の志。錫杖の一握り手の内報謝に戴けと。續け打にてうくく。爰な奉加賜の世話やき。十方且方法界の捧請取れと。同じく打据ゑ。サア出てうせいとねめ付くる。かゝる所に待賢門談天門驛ぎ立ち。地先年死したる紀の名虎。再び顯れ出でたるは地なう恐ろしや凄じやと逃廻る程こそあれ。荒れに荒れたる紀の名虎。火雷神の如く斷來り。廣國が胸骨はたと蹴倒し。地ヤアまだるし惟番親王。御身に即き給へば二條の后は言ふに及ばず。空飛ぶ鳥地を走る。地山河草木皆こなたの物名虎が再び娑婆へ出たるは何の爲。一百三十六地獄の司たる。閻魔王にも身ぶるひさせたる某。僅か六十餘州小國の王位なんともない。天皇御簾の内に聞き給へ。冠脱い

で三種の神器を渡し。大内ををつくし出られよと。御簾を睨む眼の鏡、フシ洋玻璃などといひつべし。有常も疑はしく、狐狸の所化かと。暫しが程こそまがひつれ。見れば見る程父の名虎。あさましくも悲しくもスエテ、落涙五體を絞りしが。大地を叩いてエ、親ながら情なや。我が國の王位は神明の御計らひ。人間の力に叶はぬ事申すに及ばず御存じ。それゆゑ一歳見苦しき非業の自滅。朝敵の名を沙邊世界に残されしは。子孫の恥とはおほされずや。せめて未來罪障消滅の爲。朝讀誦勳行忌日命日の申ひは。冥途へはと、かぬか申ひ届かぬ程ならば。由なき招魂とやらの悪法邪法はなどか届きしぞ。再び三途に立返り惡を積み業に業を重ねて其の身の苦み子孫の歎き。哀れとは、フシ思はずか。一向奈落に落ち給は、再び蘇生は有るまじきに。魂中有に有りし故と。思へばなまなかに。追善弔ひの悔しやと。理をつくし詞を盡し。フシ

泣叫びてぞ諫めける。名虎からくと笑ひ。親に似ぬ倅奴。せめて我が心十分一持たせたい。惟番の御世になし汝等を高位高官に昇せ。子孫の繁昌願ふ故。佛の説法聖人の教聞かぬ程の此の名虎。汝が意見聞くべきか。天皇の爲には味方惟番の爲には仇敵。親には不孝者親子の契これ迄。踏殺してくれんすと躍出つれば金吾手をすり。ハハ御尤コレ殿。親の慈悲思召し知らぬか。申し。爰は篤くと御思案の有りさうな儀と。眼に知らせ詞に心を含ませて。大事の所と氣を付くれれば。申テ、それよそれよ。天皇の御味方申せば。忠は立てども孝行立たず。又親の命に従ひ惟番に味方申せば。忠孝の兩義立つ。心を翻へし父の命に従ひ候と。云ひもあへぬに、出て来たく、それ大納言天皇を引きすり出せ。今日より親王御位と衣を脱がせ奉り。冠よ香よとひしめしめく所へ。大納言立戻り。早風をくらうて天皇は。神寶寶劍内侍所

を帶し行方知れずと。御所中の女房立騒ぎ候と。いへども名虎ちつとも騒がず。今の間に何處へ行くもの奥に忍ぶは疑なし。先づ親王を玉座にすゝめ。天皇を探せやと下知をなし各どつと駈入れば。關白左右の大臣百官百司かけ隔て。立ち隔つれども事ともせず公家も地下もいはせばこそ。かたはしに取つて引寄せ踏付けく。投倒し。難なく奥に亂れ入り。オッ上等をへ下へと探しける。フシ人間を窺ひ。紀の有常三種の神寶天皇に抱かせ奉り。衣被の女の體麗殿の楢形より。そつとぬけ出で何方よりや落つべきと。もつと窺ふ折から奥に名虎が大音聲。有常が見えざるわ有常々々と呼ばはれば。地南無三寶とうろたゆる。立部の蔭より金吾是にとつと出る。地獄で佛に逢うた心事念なり。仔細は云ふに及ばず玉體安穩業平に渡し奉れ。テ、心得たまつかせといふより早く御手を引立て。無名門の透垣より、フシ飛ぶが如くに走行く。宗岡

名虎猫の鼠を逃したる顔色。同エ、口惜しく。よし天皇は追放し一大事は三種の神器。如何はせんと身をもめば有常とほけた顔付にて。天皇なればとて翼は無し。但し天狗がつかんだるも存ぜず。地父は愛宕山宗岡は比叡の山。鞍馬山僧正が谷探されよ。有常は下の醍醐比良や横川を尋ぬべし。それにも見えす太鼓鉦。稻荷山を狩るばかりヲ、尤と立別れ足に任せて三重へ急ぎける。フシかくとも知らず。地業平主従后を安々迎へ参らせ。御門々々は人目繁し暮を待つて。局口より遷し申さんと劔かに忍ぶ加茂川堤向ふを見れば。桂金吾帝を供奉し免れがたなき毒蛇の口。虎の尾を踏む名虎が圍み。漸うと駆來り人々にはたと行逢ひ同ヤア業平公。今日大内の騒動御存じなきか。先年死したる紀の名虎再び蘇生し。伴の大納言が内通にて大内へ踏込み。惟喬親王を押し御位に即け。既に天皇御命危かりしを。主人有常敵一味の體にもてなし。地漸うに盗み出し三種の神寶諸共。天皇是にと薄衣取れば。后はと抱付く業平主従はつとばかりフシあきれて。詞もなかりけり。同いやはあきれて濟まぬ事。アレく名虎が再來跡より急に追懸くると。地聞くより五郎伸上れば。韋駄天が足疾鬼を追ひかくる勢ひ。同ハア力なし此の上は天運次第。命限り足手限り御邊と我等兩御所を負ひ奉らん尤と。地二人が背中さし向くれば。業平天皇の御肌に付けさせ給ふ内侍所。頂き取つて首に懸け。立上らんと振返り後を見れば。次第に追付く名虎が勢ひ。同ヤアく見届けたり。地あますまじいと呼ばはる聲。耳底に突通れば兩人あきれあれ見られよ金吾。同かく聲をかけられ逃走見せては勝に乗り。此方は先とられ仕損ずるは必定。いざ踏止り先を取つて打ちかけ。是非の安否を定めん。地ヲ、尤と天皇御夫婦業平圍ひ。二人は身構へ鏑打して立ちとまる。瞬く間に紀の名虎誠の虎より猶早く。土埃を蹴立て飛んで來るをやり過し。真中に立挟み。同ホウ珍しい娑婆の歸り新參。只今手にかけて逗留の間もなく。本の冥途へほつかへすも不便至極。同金吾が爲には家の主君善惡の返答にて。娑婆世界の逗留か。但し立歸りか望次第と。鞘口。フシ抜きかけつめ寄つたり。同名虎びつくとせす。愚人ともうつけとも。目前手に取る果報を知らず。無用の忠節仁義だてに咽をほす汝等。冥途では有罪餓鬼。其の刀抜かば抜いて見よと。地くわつと睨むヨリ眼の稻妻。面に火矢を射かぐる如く。腕すくみ氣も臆れ。覺えずしされば名虎も續いてとゞろ足にてつめかくる。跡より般若隙を窺ひ狙ひよれば振返り。はつたと睨めば性根を奪はれ心ならず跡じさり。弓手馬手より狙ひかゝるをねめ伏せ。く毒龍惡虎の勵みをなし。遁さぬやらぬと兩方より。一二の拍子に聲をかけて。ナホス切りつくる。小躍してひらりとほつし。二人が胸

板はつたくと左右へ蹴倒し飛びかゝり。業平の細首つかんで投げのけ。天皇后を兩の小腕にしつかと掻い込み。一しめしめてつつ立ちあがり。四サアうぬら切先でも上けるが最後。きやつらを則ち締殺す。地ぞこのけやつと怒る聲。金吾も般若も心ばかり玉體危く持ちたる太刀もひらめくばかり。スエチ牙をならして控へたり。后御息絶えんく我が命はし庇ふな。天皇様のお命救ひ申せと泣きこがれ給へば。いやく我が身一つ助けんとて萬民を苦しめ何かせん。朕を捨て代をも位をも兄惟喬に參らせ。世界の亂を鎮め國民を助けよとスエチ御涙にくれ給ふ。フシ敬慮の。程ぞ有難き。因テヲ云ふ迄もない日本はこつちのもの。汝等は冥途の王となれ。地サア只今と既に危く見えければ。其の際に業平内侍所の御正體。からけを解いて名虎に向ひ差上げ給へば。コハリあら不思議や神國清淨の神鏡。光明あ

し給へば。朝日の氷春の霜。髭鬚皮肉消えく爛れ失せ。頭は空の鬮體。形は白骨連なつて。纏める簾刻める石朽木の風に破る。如く。ばらばらと碎け散つたるは。前代未聞未代不思議。フシはあと一度に禮拜ある。金吾立寄り。根深く仕込みし惟喬の謀叛。地有常は何時迄も敵一味の色を見せ。すは御大事に及ぶ時は。窃に内通申す所存。兩御所一緒に忍び給ふは人の見る目恐れ有り。后は主人有常に御預け。あれ遠方の小路小路宗岡が軍兵充ち満ちて。君を捜す波事迫らぬ其の内と連理の枝を引分けてオアリ別れ。別れに業平朝臣天皇の御手を引き。金吾は二條の后を供奉し。無念を胸に押包む人目をつつむ道よくる徑。細道傳ひ道。分け行く草の葉末まで。昨日の味方今日の敵。時に變じ日にかはる人界不定の心は淵潮。風に從ふ雲水の大和。河内へ分けり。

林清さる間。地對王殿。御臺所に近付き。生きとし生ける者ごとに。父も有り母も有り。某に父といふ字は御座無きか。なう父こそあれ。勅勘を蒙りて。筑紫へ流され給ふと有りければ。其の儀にて有るならば。あかぬ暇を賜はれや。父を尋ねて參らばやと仰有る。地御臺所聞召し。さ程に思ひつめたらば。自らも尋ね上らんと。對王兄弟。乳母のうはたけ御供にて。國を出づるは何時頃ぞや。三月廿一日に。オクリ旅のハ装束ナホスラジなされける。地山樺太夫が古事を今身の上積みて知る。落人の身に。フシ業平は。墨の衣に投頭巾見る目忍べば日暮しや。人をすゝめの歌念佛。スエチ修行の僧に身をやつし。兎鐘肩に打懸けて。眞紅の紐のかねてより。知らぬ拍子はうつゝなや。勿體なくも天皇を施物の箱の片々に。三種の神器を隠し入れ般若五郎も頼被り。撒ひし棒のおれそれも。御免を受けて隔てなく。フシオクリ紛れハ落ちさせ。給ひける

第二 業平歌念佛道行

フシ都に残す。初冠。今日は頭の透額。オ
クリ窃に。井出の玉水の数はひいふうみか
の原。フシわきて流るゝいづみ川。衣かせ
山假初の。族と思へど君ませば。オクリ是も
へ行幸のためしぞと箱に向ひて再拜し。
御先を拂ふ警蹕の。長地聲は昔に變らねど
變る水嵩の木津川は。誠淵瀬の類かや。朝
出の賤の鋤鉞や。畔に草刈る人影に。スエテ
業平鉦を拍子とり。林清。是は扱置き。對王
殿や安壽姫。丹後の國由良の港。山樺太夫
が買取つて。地渡す道具は何々ぞ。桶と柄
杓と鎌防。兄弟是を請取つて山とフシ濱と
へ。泣き別れ。絶無無慙やな對王が。山風
に吹立てられ嘸寒からん可愛やと。スエテ流
涕。こがれフシ泣き給ふ。今は四邊に人も
なし箱の内さぞお氣つまらんと。蓋を開け
ば天皇は。吹傳へたる神風や。御堂澤川
の濁り世に住むかひも無き身なれども。よ
しや世の中治まらば。今の情は忘れじとい
とも長き詔。業平草にひれ伏して。河

内の國高安左衛門が娘生駒姫。某に和歌の
指南を請け。文にて語らふ契もあり。頼
むに疎略候まじ彼處に忍ばせ奉らん。かゝ
らざりせば如何にして君が見るべき名所
の向ふに霞む奈良坂や。牡鹿ならでも春日
野の。枝に角ぐむ八重櫻。あれく御覽せ
秋篠や外山の峰の松檜。葉末きらめく夕づ
く日。薄紅に薄萌黃。あかね詠は。如何
にとも岩瀬の森は。フシあれとかや。鶴も重
ぬる諸翼。齡も永き龜が瀬の上を歩みて。
行く道は道の道有るすべらぎの暫しこそ。
花。曇りなれ。地散慮を苦め給ふなと云ひ
も果てぬに群鳥の。はつと羽をのす其の音
を人かとあわて天皇を。箱にあたふた引き
しめて。林清ヤアいかに對王殿衰落し物な
らば。追手かゝらんは治定なり。然らば近
き寺を頼め出家は六戒を保つ故。其の身は
果てとも出さぬぞ。サイく急げ。此方も
急げ仲則と。昔語を身の上に。フシ箱を肩け
てとつかはと。フシ起立つ野路の。袖の露草

の振指忍ぶ身は。人目恐ろし鬼取山くらが
り峠打過ぎて爰は。御燈の明らかにかにも高
安の神垣に暫く。疲を三疊休めけり。
社内に人音賑はしく。高安殿のお下向お
供のお衆と呼ばはる聲。業平聞付け給ひ高
安殿の向とは。後家の老母か孫の生駒姫
か。若し伯父大炊之介か誰にもせよ。願ふ
折から心を窺ひ頼まんと。般若五郎を傍に
フシ。忍ばせ待ち給ふ。地程なく下向の女乗
物玉を飾りて花臺。二月の雪の振袖の腰元
婢取巻きて。フシ。徐に道を歩ませしが。地
業平を見て女房達。あれ日暮の歌念佛お慰
みにと興立てさせ。同コレく坊様。す
んどあはれな涙のこほるゝ様なこと聞きた
い。とてもなら山樺太夫が所望々々と呼ば
はれば。業平頭巾肩深に鉦打鳴らし聲し
はぶき。國分寺にて對王丸。お聖頼むを身
の上に。スエテ引きなぞらへてぞ語らるゝ。林
清さる程にいたはしや對王殿。山にて帥御
に暇乞。谷峯越して落ち給ふ。是と申すも

山樾大夫惟喬が。邪見謀叛とフシ聞えける。肩に掛けたる箱には。對王殿の守本尊。

清和なる天皇様を入れられたり。かゝる所に宮参りする人に行き逢うた。頼んで見

ばやと思召し。此の邊に在所はなきか。在所こそあれ。寺は無きか。寺こそ候へ。

本尊は馬頭觀音が。馬頭は馬の頭とかく。駒といふ字を名乗る人。跡より追手のかゝ

る者。よそにも人の聞くものを。某が名は申さぬなり業平にかくまひ給はれや。契も

あれば申すなりなりひらに。くくと我が名をば。餘所に知らせて頼まる。對王殿

の心の内。聞いて推量なされやと。貴賤上下おしなべて感ぜぬ。者こそ無かりけれ。

跡は段々お望み次第。女子衆聞いてか。哀なかな。地くいと。いへどもきよろりと女房

達。涙が出さうで出でかねて。哀さうで地何ともない。フシア、泣きたやとぞさ

めきける。乗物の内より局めく者召寄せ

て。何事やらんつどく。仰付けらるゝあい。

あい。くくくくと承り。業平のそばに立寄り。乗物に召したお方を御存じ有

つてか。對王丸によそへ置まへ申せとのお頼み。そなたの御名は合點ながら互にあげ

て云はぬが秘密。此の年月歌の點取りに事よせて。文の数々申せし如く。いつか

くと逢瀬を祈りし中なれば。早速かくまへ屋敷に伴ひ申したさは。飛立つばかり

フシさりながら。振分髪の井筒とやら其の外お心多きが玉に瑕。御心底の奥底を聞き

ましたいとの御事と。辯舌さばけし長口上。業平扱こそ音に聞く。生駒姫と頼もしく。

井筒のいの字は門柱に打つ看板ばかり。眞實は河内の河水に首だけ。もし心かはら

ば二度冠を戴くまいと宣へば。ア、御心底見えしました。地然らば直に御夫婦をお輿

の中で抱合せ。連れまして歸るが御合點か。それこそ願ふ所是般若。其の箱荷うて

先に立て。地我は姫の情にて相與にて跡か

らと。立寄り給ふ簾の中より。我が戀叶ひ

しお嬉しやさらば抱いて乗せませんと乗物の戸押明けて。によつと出でたる其の形。

生駒にあらぬ猫股の化損ひの古婆。白髪齒抜のちよほ口して。はいやりゑがほも舌た

るく。なう戀男ヲ、く、フシいとと抱きつけば。業平ぞつと身ぶるひいやらしく。

身を縮めても證方なく腰元つきく手を取

り腰抱きお二人を。一つに乗すれば業平も

年寄くさゝにむせ返る。山樾大夫のおひじ

りの對王入りしは古葛籠。是は古祖母乗物

も戀の重荷にはいくく。道を早めて三

行雲の。フシ上迄其の名。高安の。

左衛門が獨姫。三美人の其の一人と沙汰

にのりたる生駒の前。父母は世を早うしあ

ひたてなたつ祖母育ち。伯父大炊之介後見

に不足なき身の乏しきは。間に枕のフシ一

つなり。地此の頃續く春雨に歌の句合せ糸

竹も。スエチさのみ心の變らねば。地腰元

婢引連てフシ軒の玉水。雨だれ落ちて行水

に。隈笹ちぎり舟拵へてさびしさ流す笹舟

の。さつさ流れて。思ひは沈む戀は浮かれ
て水刷棹。地先行く舟の影もなく跡の友舟
袖濡れて。舟引直す指のさを。歌手飼ひの。
猫の諸共に。ナホスちよいと手出して。フシ戯
れば。阿、あぶな三毛よ川へはまるな。
可愛いものやと猫撫聲の。撫でつ擦れば
しなだれて。フシ餘念馴染のやさしさよ。地
奥より婢駈け来り。御隠居様の湯上り。
姫に髪梳かせ香も留め。美しう結うて貰ひ
たし。地呼びませいとて只今お風呂に召し
ますと申し上ぐれば。阿、ウ輕忽。あの
祖母様の白髪頭小枕髻も入る事か。誰の彼
のと手嫌ひなされ。いつにない香留めての
梳けのとは。たんとお氣が若いだ。但し誰
ぞに惚れてかの。地皆知らぬかと宣へば。
如何にもく老にはれて御座んすと。地
どうと笑うて姫諸共。オタリ打連れ。奥に玉
櫛筒。地鏡臺紅皿白粉筥。嗜み道具列べ立て
待つ間長湯のときみがき。湯殿を出でて老
の身の。浴衣姿をみつわぐむ鏡臺前にやあ

ゑいと。膝を組み給へば可笑ながらも生駒
の姫。スエテ櫛取上げて梳き返す。江戸もつ
れ日髪は。フシすぢりもぢり。誰様故ぞ誰が
爲と。問はんも祖母の前髪の。分けて。か
くとも。フシ云ふに云はれぬ。髪品のさへ百
歳に。一歳足らぬ九十九髪。梅花の油梅が
香に。小オタリ黃楊の。小櫛は春めけど。けづ
ればつもの。雪箱と。フシ粉ふ白髪の影見れ
ば。地悪の鏡や。オタリ老いにけらしな。う
とましや十九や二十の黒髪に。變らで澤の
付くならば。何か寶の惜しからん。フシかの
髪染むる。藥をと仰に任せ腰元達。思ひ筑
摩の鑷墨を。油に溶きて振り付けく。オタリ
染むれば。染まる黒髪の澤は烏のはね鬢。
柳のさけ髪はたんつと。さも若々しく。フ
シ結び立てて。地サアお年を八十取つて除
け跡が十七花盛り。ほつとり者のしなもの
様。フシおやちよいくとぞ譽めにける。
地ためつすがめつ姿見の二つ鏡に莞爾と。
阿、上手によう結やつた。生れ付きの生

地がよさに。少しつくれば水際が立つわい
の。とても事に白粉頼む。地口紅付けて
と差出す顔。ふつと噴出し堪りかね。阿申
し祖母様。けしからぬ身たしなみよもや戀
はなされまじ。地何故にかと尋ねられ。阿
ハテ戀ならで何の身たしなみ。高安の明神
の縁結び給ひし。在原の業平様。まだ祝言
の様式はせねど二世迄夫婦の契約。容姿つ
くるは夫の目によい見られたき女の因果。
サアけな人ぢや。鏡でもろくに目が見えぬ。
地化粧頼むと白粉溶きさし出せばぎよつと
して。顔悪くも小腹立ち。阿敵の寄つた顔
に白粉の付けやう存じませぬ。フウ愛想も
ない。皆来て白粉塗つてくれ。地腰元ども
と呼集め片顔つづつを分塗に。急ぎの普請の
壁塗る如く。敵引張つてへたくと。年
古る顔に置く霜や白きを見れば夜目遠目。
九十過とは。フシ人知らじ。阿ドレ小袖に匂
ひ留めたか。人の所體は衣紋が大事。下
紅鹿子中八丈此の縫入れの染小袖。なんと

上着に似合うたか。地大輻縹子の後帯腰の小箆は伸びたれど。肌の皺のす火熨斗がなほしやくも戀の欲さぞ我が夫のお待遠。詞足姫女子どもよく聞け。此の障子より奥の間へ。一足にても踏込まばすぐに追出す。

伯父に言ひ付け急度曲事々々と。小篋がい取り届んだ腰を無理やりに。しやならくと。行く振りは。女郎狐の化をして男ばかりと樂天が。フシ詞も思ひやられたり。地姫は餘りに興さめて。業平様は日本一の美男。歌の點取りに事寄せ心のたけを口説き。情のお返事度々にて。お顔こそ見ね七生五生變るまい。夫婦と胸を据ゑしもの。地其の事御存じあるかなきかは知らねども。三年たてばおとしも百大抵の婆かいの。京より伯父様お歸りなされ現在の我が子に。そもや其の顔見せられうか。國物が憑いたか狂氣か。業平様は情人年寄の心を憐み。一夜二夜は慈悲の爲と。推量はしつとも色好みの物好き。若いより年よりの何處ぞ

に思ひ込みの有るまじとも云はれねば。腹が立ち妬ましい。廿に足ぬ孫娘が百になる祖母と。憎氣いさかひ顔振合ひ。家内取沙汰世の口の端。業平様の浮名の恥一門の恥はいかばかりかと。妬みつ恨みつ様々に。スエテ身を投伏して歎きしが。詞とにかく此の上は業平様のお心一つ。眞實か偽りかどうぞ氣を落ちつけんと。地平。習を短冊にオクリ思ひを。染むる紅粉筆や千々の心を三十一字。碎き詠んだる一首の歌。行く水に數書くよりもはかなきは思はぬ人を。フシ思ふなりけり。地扱此の便誰をかな。女子供は祖母様へ恐れて側に寄りつかず。地猫よ來い。生駒が味方は三毛ばかり。届けてくれよと首玉に。短冊しつかと結び付け手玉に廻る唐猫よ。歌我が身は戀に迷ふとも。主なたがへそ此の短冊の。ナエス行く手にしなへ。オクリしなへや。しなへと小手毬をついと投込み。追うて小猫も玉につれ。フシ障子の内へぞ入りにける。既

に其の日も暮れつ方伯父御様お歸りと。下臺所賑はしく大炊之介奥に入り。なんと生駒。先づ母も機嫌よくお身も無事で満足。扱金銀にて買はれぬ土産有り。地これへくと膝許に招き。地此の度五畿内の驢。清和天皇都を逃げ去り。惟喬親王十善の御位に即かせ給ひ。美人の聞え隠れなし。生駒の姫を后に上げよとの宜旨を請けて歸りしは。家繁昌其の身の果報。此の上の土産有るまい嬉しいか。その上當國は。業平古への知行所の所縁。天皇を供奉しさまよひ行くは必定。地扱取つて參らせよ和泉河内兩國を。下されんとの繪旨頂戴目出度いか。地扱何を聞いてか道すがら。業平と母者人夫婦に成り。天皇諸共かくまへ置かれしとの取沙汰。年にこそよれ世のあだ口。たは言とは思ひながら。常々お身が歌の批判頼みし業平。地いづれ形は有る筈。フシ包ます語れといひければ。地はつと胸にこたゆれど素知らぬ顔にて。地い。音にも沙

汰にも聞かぬ事。祖母様に問うて見給へと。

地立たんとすれば待て〜。祖母は昔人

道だてばかりに身の欲知らず。談合のなら

ぬ氣質。地そのとほげくはぬ〜と引きと

ひる。エ、伯父様御疑ひ深いお放しなされ

誰そ来い〜の聲に小猫かくわら〜と。

なつきて膝にフシ駈上がる。此の類た

付けたは文か短冊か。地イエ何でもない

隠すを押へて引つちぎり。ム、歌の返し。

行く水と過ぐるよはひと散る花と。いづれ

待ててふことを聞くらん。是見違へぬ公家

の筆。業平ならで何公家。伯父をぬ〜

だましたな。サア地ぬかせとひしぎ付け睨

み殺さん面付にもちつともひるます。水

責水責に逢ふとも。知らぬ事は知らぬ

〜。エ、しづとい女。水責にしかねうか。

地言はせて見せんと夕暮の村雨しきる廣

庭へ。宙にひつさけ飛んで下り地伯父を

欺す天間の天より下る水くれんと。軒の

寛の立筒踏みこはし髪を揃んで。仰向

けに取つて伏せ口押し割つてさし向けたり。

地折からしきる雨の脚漲りおつる雨垂は。

連々としてうつつすが如く。眼を閉づれば鼻

に入り。口を塞げば息ふさがり。のんどに

詰まる苦しさに。兩手に掩へばもぎ放す。

動き働く亂れ足。風にもまるゝ露の玉。オ

クリ消ゆる〜間近く見えにけり。暫く聲

るゝ雨の小止み。奥にざゝんざ濱松の音

フシ三國一と謠ふ聲々。耳を澄してあの酒

宴は奥の書院。しかしも祝言の誇ひ物。同

家に居て知らぬとは嘘つき奴。ぬかさねば

しめ殺すと細首押へてきめつくる。地ナウ

人を苦め我も心勞せんより。祖母様に問ひ

給へ。祖母様なうと泣き喚げば。母に聞

かせてよいものか。息ほね立てなと地せり

あふ音漏れ聞えてや母走り出で。ヤア無法

者の悪人めと。庭に飛び下り大炊之介が髻

揃んで膝に引つ敷き。ヤレ女子ども生駒に

小袖着換へさせ。心は如何と痛はらせ。同

憎や〜悪者奴おのれを生んだ母。九十に

餘つて紅鐵葉白粉髪を染め。若い男を持つ

ものが。大抵の婆と思ふか。はたらきだて

めさると此の咽笛。常に放さぬ懐刀手を

かけるが最後。京より今歸りがけ母の前へ

も面出しせず。何故姪を水責ぬかせ〜と

せたけられ。日頃手並の母の威光。力自慢

の髯男。眼をまち〜と言句も出さず。姪は

見かねて。惟喬親王より帝様業平様を擲

め取れ。恩賞せんとの諭旨を頂き。それ故

御座所を白狀せよとの水責と。地聞くより

母上さこそさこそ推が違はぬ。地やい天道

知らず。帝様は日の本の主。天照大神より

傳はる三種の神器といふ。御寶を玉體に添

へてましますもの。縛り揃め神罰當らぬ程

ならば。月日に光もあるまいか。業平殿は

此の婆が戀男。たつた今縁邊の歪取交はず。

親でも子でも夫の敵。地此の世の暇と懐中

に手を入るれば。御ア、御免々々母やや。

業平殿に御縁組と候へば。我等が爲にも後

の父。親の罰神罰身を知らぬ者の有るべき

か。地只今より天皇の御味方。眞平々々と詫ぶるも聞かずからくと笑ひ。地やい左様な甘い事くふ母でなし。地慥に根性入れ替へる。證なうては突殺すと。きめつくれは御尤々々。地則ち惟喬親王の論旨は有りりと。地懐中の一通取出し寸々に引裂き捨てたりけり。ヲ、満足々々此の高安は業平の御父。阿保親王より此の方在原氏の御領分。御厚恩の我々忠節とは斯様の時。業平様は後の父孝行も此の時。都より討手向は、一支へ支へ切散らし。帝を始の御位にかへし奉るこそ。家の譽身の冥加。出来したく業平様頼み上げ。折を伺ひ奏聞申さん。先づ部屋へ行て休息せよと云ひければ。此の上は千騎萬騎の御味方。業平公迄お執成し母ぢや人頼み奉ると。しをくと座を立つて。ヲおのが部屋にぞ入りにける。サア、業人奴がどし性骨こち直した。地姫こちおじやと誘ひて。座敷にての三々九度取納め。祖母が役は是迄。地是からが新枕そ

なたへ渡す。地業平様のお寢間は奥の鷲の間。在所住居のお氣晴しそなたは積る念晴し。早や行て寝やとさやけば。地ヤ、イヤ、祖母様のよい加減な嘘ばかり。ふはくと詞にのせ跡で迷惑させんとか。地お前の戀を勿體ない羸落す氣はないと。涙ぐめば涙ぐみ。地お前の戀とはあさましや。地髪に百歳の雪を頂き腰に梓の弓を張り。志質のさ、波身に寄る鞍。石塔に同じき身をもつて。後世菩提の外ならで何の因果に戀をして。地獄に落ちたかるべきぞ。業平公御先祖より御知行の地をせばめ。安穩に暮せし御厚恩此の度と思ひしより。地底意の知れぬ伯父の業人奴。道を言ひ義を言うては釋迦達磨でも用ひぬやつ。業平公は我が殿御家の主と定め置き。精根強く氣の若い體を見せ。仰へん爲の老の分別。此の後とても表向の名前は祖母が夫。肝心の正味はそなたの殿御。地早や行て寝やと、ヲ有りければ。につと片頬に恥かし笑ひ忝い事

なれど。地案内なしにお寢間へ参らば。女房が變つたと御機嫌が悪かるか。氣遣に存じます。ア、つがもない何のいの。黍園子と饅頭はあなたの換へ徳。地はやいきやとオクリ障子の、内へ押入れて。地母は姿を二重にし。ヤレ女子ども腰元どもちやつと來い。地屈んだ腰を伸したればちぎれてのく程なう腰いたや。白粉で顔がひつばる。部屋へ行て洗ひ落し休息せう。地腰揉んでくれ肩打てと。ヲ奥の一間に入りにける。地誰する業とも闇の夜に大石小石四方八方。はつたくと段込み投込み。兩戸障子闔鴨居打碎き打破り。軒の瓦も碎け散る天狗。地も。かくやらん。地業平驚き帝を供奉し端近く立出で。地祝言の夜の石打は打固めるとして目出度けれども。是は餘りに目出度過ぎる。地玉體危し誰か有るあれ鎮めよと宣へば。地大炊之介罷出で。我等は母が末子大炊之介。御祝言の上からは業平公を父と仰ぎ。一命擲ち一天の君に忠勤。地石打の

體てい性せい番親王の討手疑なし。玉體危く候へば當國志たうこくし貴の山迄。一先づ落し奉らん。フシ早とくく奏すれば。地業平悦びテ、いしくも申せし汝。供奉仕れと君を渡せば大音上げ。ヨイ業平のうつそり。最前惟番親王の繪旨と。引裂き捨てしは遊女の痴話文。母を始めおのれ等に一ほんさせ。帝を奪はんとの大炊之介が趣向を見たか。序に業平も仕舞うてのけん。地おり合へやつと呼

ばはれば。石打のあふれ者どつと喚いて込入つたり。般若五郎躍り出で。どつこい息子殿。御酒にたべ酔ひ前後も知らず沈酔し。己れに帝を奪ひ取られた是からは又取返す。此の般若が趣向を見よと腕め付くる。地イヤ推參大般若でも摩訶般若でも。落人の素波羅密何ともないといはせもあへずテ、其の頸を此の足で。華嚴阿含ほうと蹴返す。方等般若が手並を見よと。打つたる大石おつ取つてばらくく。微塵になれと打付くればたまり得ず。帝の御手を引

立てて。フシ皆散々に逃けてけり。地南無三寶帝を奪はれしと狂氣の如く業平も。討つて出でんとし給ふ所に。隙を窺ひ大炊之介業平に討つてかゝる既にかうよと見えた所へ。地般若の五郎天皇を奪返し立歸り。かくと見るより飛びかゝりゑいと打伏せ足下にふまへ。個性戀もなき不敵者。帝を奪ひ取りよう氣遣させたな。其の返報には首引抜かんと兩手を頸に掛けんとする。やれ待て殺すな。善惡共に親の習ひ。千代もと祈る子を殺し。地たとへ老母が歎かずとも此方の心こゝろよからず。唯追拂へと宣へば。般若五郎本意なけに。一度ならず二度ならず面恥掻いても生きたいか。地の代りの腰骨と残り多さの地踏躑躅み。續けざまに七ツ八ツ踏付けく。蹴とばせば。腰を押へてアイタ、タ。面をしかめて起上り。なんほ踏まれても大事な。命にかへくとはいかい大恩。待つてるよ此の恩は追付け仇で報ぜん。フシ跡をも

見ずして逃げ失せける。地どうでも生けては後日の仇。しまうてのけんと又駈け出づるを引止め。鎮まれ免せとなだむるも。仁有り義あり情有り忠節有り勇力あり。不孝の子には天罰有り孝行の子に聖取有り母には智あり譽有り。文有り武有り花實あり道ある君が行末は。待つに心の頼み有り心まめしけ在原の。業平朝臣の物語傳へて。今に興じける。

第三

も心在原や。さすがに業平の。舅君よと

フシなまめかし。今日は姉君井筒御前泊瀬の

観音御参詣と。内立關に乗物寄せさせ。井

筒の姫信心深き袂の中につまぐる數珠。口

に大悲の御名を唱へ立出で給へば。北の方

御覽じ。圓なう繰返しくくどう云ふには

及ばねど。二條の後高子の君をかくまへ参

らせ。泊瀬寺に隠し置く事敵の方にはよも

知るまじとは思へども。此の度有常殿を大

内急の御用とて都より召されしは。地もし

や此の詮議かと心もとなさ氣遣ひさ。萬に

一つ漏れ聞え二條の後を敵の手へ捕られて

は。有常殿一代ならず子々孫々迄不覺の恥。

大事の上の大事なり。圓急いで別當の御坊

へ頼み置きしも此の一つ。兩人の家老ども

伊勢八幡方々の代参も此の立願。そもじは

彌觀世音に祈請をかけ。今夜はお通夜がて

らに后のお心慰め給へ。下主の女や下部ど

もよしない取沙汰せぬ様に。地そばの者ど

も迄留守なれば。いつよりも猶大事と下知

は男も及びなき。フシ天晴高家の北の方。

其の習はしに井筒の前。餘の佛菩薩千體に

勝り給ふ千手の誓。圓我世の中にあらん限

りは只頼めよとの御誓願。明暮信じ頼みを

かくる上からは頼もしう思召せ。后様は觀

世音様のおかくまへも同じ事。お氣遣ひ遊

ばすな。若草。姉が留守の手中習しや。地

歌もよみやと小褌かい取り乗物に。女房達

がとりふに裳かきよせ押入れて。お與參

られといふ聲に。あいと答へて對の六尺對

の鉢巻。足並。足取。肩を揃へて。フシ昇出

だす。地お與添の中居が。いつより白粉た

つふりと。塗笠さけて跡に付きお供廻りは

輕けれど。願力重き泊瀬詣で。オクリ館へ賑

ふ折からに。廣間の侍表使の女中を以て。

圓只今都より勅使とやらんのお使とて武士

一人。兩家老衆へ對面せんと。地御式臺迄

参り候と申し上ぐれば北の方。圓ア、心得

何にしても惣束なし。兩家老留守なれば。

金吾が妻の紅梅を呼びよせて挨拶さしや。

地自らも餘所ながら御躰越しに立聞きせん。

皆々行儀亂して京侍に笑はれな。餘りに燃

熱過ぎて侮らるゝなと末々迄。心遣り戸を

押明けて屏風のフシ蔭に入り給ふ。地暫く

有りて人物らしき髭男。直垂上下長刀指こ

はらし。使者の間にむんずと坐し。圓家老

の人々に申し談する旨有り。地御意得べいと

ぞ權柄なる。流石一家の執權職。柱の金吾

廣國が妻。おめたる色なく會釋して出迎ひ。

圓紀の有常が家老と申して。一人は民部太

郎俊綱伊勢兩宮代参申付けらるゝ。今一人

は桂の金吾廣國。是も昨日より八幡住吉代

参。何れも館に在合せず。則ち我等金吾が

女房紅梅と申す者。女どもも苦しからずば

御口上仰せ置かれませ。主人有常は急の召

にて。一昨日上京致されしを御存じなうて

か。地京都よりとは何方のお使者。速々御大

もく有常の在京も合點。某は伴の大納言

宗岡が家臣丹内兵衛といふ者。主人大納言

勅説を蒙り。有常を大納言宅へ呼寄せ。目

の前にて書かせたる有常自筆の一通此の狀

箱にあり。披見して今夜中に急度返事致さ

れ。其の上にて此方へ請取る物も有る筈。

明十八日の早天に違ひなく渡さるべし。是

此の狀は。其方の主人紀の有常の狀。使は

伴の大納言使なりとぞ述べにける。ハア御

口上承り届けしが右申せし通り。兩家老他

行なれば早速のお返事申されず。歸り次第

主人の文披見致し。お請は是よりお使者は

先づお歸りなされ。此の由仰上げられま

いふをも聞かず。ヤア自由らしい紅梅とや

ら。遙々下りし丹内兵衛。小丁稚などの使

の様に先づ歸れ。此方より返事とは上へ慮

外使者への無禮。此の家中に家老の外人は

無きか。誰なりとも然るべき者披見するに

何の事。門前の町屋に旅宿して待ち申す。追

付け返事々々。地宜旨を請けたる大納言の

使勅使同然。齷相に思は、有常の身の破滅

後日に恨みめさるなといひ捨て、フシ座を立

ち歸りけり。思ひ寄らぬ使者の口上とかう

思案に落ちざる所に。北の方立出で給ひな

う紅梅。始終聞くに付け如何にしても氣

遣はし。先づ御狀箱の封を改め開くまいか

と宣へば。さればなア。尤殿様のお文なら

ば。いくらも有る侍中にお使仰付けらるゝ

筈。敵件の大納言が家來の使では。此の文

粗忽に開かれず。兩家老の業も今日の日中。

此の五月の永の日。遅うて今夜初夜迄には

下向の筈。とやかくいひ延べ家老衆の歸り

をお待ちなされぬか。いやく。今の使者

の言分家老の外に人は無きか。返事遅くば

有常破滅と。詞に釘を刺いたぞや。ハテそ

なたは誰を桂金吾の内儀よ。民部太郎は自

らが現在の兄。そなたと我は金吾民部も同

然。いざ封を切らまいか。ア、先づく先

づ先づ待ち給へ。大納言方へ殿を呼寄せ。

目の前にて書かせしと申すからは。往生づ

くめに如何なる難題書かせしも知れず。開

いて跡の返事。北の方様や此の紅梅などが。

女の智慧に行からやら行くまいやら。氣違

に弓と矢持たせし如く。何處へ矢先が飛は

うやら底の知れぬ狀箱。開かぬ先が御思案

御思案。地ヲ、云へばさうかと引寄せて。

二人が中の玉手箱明けて悔むか悔まぬか。

案じ亂れし黒髪に、フシ年を寄らするばかり

なり。時に廣間の侍騒しけに。丹内兵衛が

旅宿よりお返事聞きに參らんか。遅しく

と使重り候と。申し上ぐれば北の方。あれ

を聞きや。最早思案所でない何とせう。ハ

テ是非に叶はぬ。地獄へ落つるか極樂か。

二つ一つに封お切りなされませ。ヲ、運次

第と御厨子のはさみ切りほどく封の印。是

殿の御判紛れなしと。改め開く狀箱の中の

一通上書に。桂金吾廣國。民部太郎俊綱

兩人立合ひ披見すべし。紀の有常。ム、地

御自筆に疑なしと掛紙放し押開き。書面の

始終一々具に目をとめて。南無三寶ハア、

はつとばかりに差置き給へば。紅梅取つて紙面の前後。讀み返し／＼ぎよつと驚く眉に皺。なんと北の方様。なんと紅梅。ムウ。ムウと手を組みて、フシ胸を。ついたる顔色なり。紅梅溜息ほつとつき。何さりとては料簡もなき此の文體。二條の后をかくまへ。泊瀬寺に隠し置きしこと顯はれ陳すべき様なし。今夜中に後の御首討ち奉り。丹内兵衛に渡し明十八日早々京へ上せとのお筆。敵大納言文章好み。のつびさせず書かせし文とは見えたれども。地お學問の智慧と云ひ案深き殿様。何とぞ外に隱密の便なさるゝか。御心の通し様も有るべきに餘り一途の御文體。ま一度讀まんを取上ぐる文體の底。杜若の花一輪押入れて置かれたり。扱こそ／＼。是御覽なされませ。御ヤア誠に。アこれにはどうぞ心が有らうぞや。お側に在りしを幸に。人目忍んでそつと入れ給ひしものとは見えたれども。狀箱に杜若は如何なる義理ぞ。地日來數々の書に眼をさらし。和漢の故事に達したる有常殿深いお心有る筈。及ばずながら自らも判じて見ん。そなたも考や。アどうかなあ。ア何とかなと額を傾け紅梅も。又紫の色々にフシ重ねて心を碎きしが。北の方文繰返し横手を打ちて。御ア、聞えた／＼。是なう紅梅。此の文の日附と杜若の花を隠語にして解いて見れば。似せ首をして后のお命助けよと解くわいの。エ、して其の心は。ヲ、解いて聞かせん篇と聞きや。是此の御狀の日附。男の文には五月とこそかくべきに。あやめ月と遊ばし箱に入れしは杜若。地似たりや／＼杜若花あやめとて澤邊に咲きし盛にも。何れあやめと引きまがふ。まして況や切ればしほめるかほよ花。誰かそれぞと見知らべき二條の後の花あやめに。似せて切れとの杜若其の名所は三河の澤。三かはといふに身替りの理はおのづから籠るを以て。扱こそ身替り立て。地后のお命助けよとは解いたるぞやと。判じ給へば紅梅もあつと手を打ち感じ入り。かけもかけたなり解きも解く京と大和と隔たれど。謎掛け渡す八橋や杜若の一輪にて。大事を知らする有常の作意も、フシ和歌の威徳なり。少し心も休まる所に取次の侍聲々に。都の使お返事聞きに是へ／＼といふ中に。丹内兵衛首捕持ち。案内もなく次の間に踏込みうなり聲。地返事は何時迄待たする。勅使同然の使者無禮至極と呼はつたり。地紅梅俄に心急ぎ。サア／＼北の方様事急に迫りしが。此の返事は何とがな。御ハチ后のお首打つて渡さうと返事しや。殿のお心盡されし謎の心。そなたはまだ解けぬか。サアあやめの謎はとけても。似たりや／＼の杜若はどれ何處に。身代りとても人の命咲いた花もぐとは違ふ。心易けに何者の首をか。地ためらふ間も丹内兵衛返事、フシ／＼と取頼る。是花をもぐより心やすい身代りの命。自らが分別有り。御首急度相渡さんと返事して。地はやく／＼いなしやと宜へ

ば。紅梅頷きしづくと立出で。お草臥の上お待遠は御尤。有常方よりの紙面。二條の后を泊瀬寺に匿へ置きし事露顯の上は。お首を討つて御使者へ渡せとの趣。主人自筆の墨付参るからは。焼お首を度渡しませぬ。それ迄は御逗留御苦勞千萬。先づ料理申付けませう。や料理所望に存せぬ。然らば焼迄にこの器に入れ。相違なく渡し召され。半時でも刻限違へば。座敷を蹴立て歸りけり。紅梅一返事は致せしが。代りなどは。假初ならぬ重い事。御心底そつと聞かさせ給へと立寄れば。其の通り。壁に馬乗りかけ。誰をかうとの智慧もなし。寶は身のさし合せ。此の時の子寶娘有るこそ幸ひ。妹の若草は漸う明けて九つ若千の違ひ似もつかず。后様と姉とは相生。

いふ詞の先折つていやく。井筒様には在原の業平殿といふ殿御有り。夫有る娘は。とすれば待ちやく。其の業平は何人后の御家來。主君の代りに女房殺す業平望では有るまいかなんと。りくわつとせいたる面色。紅梅居丈高になり。身代りの分別有りとは其の事か。よい分別のこれ。業平様有常様の爲に二條の后がお主なれば。此の紅梅が爲に井筒様は。大事のくのお主。殊に母がお乳を上げ。申さば乳兄弟重々の御縁。第一夫金吾が合點せぬ事。ア、家老殺が。慮外ながら。エ、何ぞよい分別有るかと思へば阿呆らしい。鼻の先智慧な返事言はせ跡へも先へも行く事か。使者に向ひつがひし詞は取返されず。捨て駆け出つるなうこれ。首を討つとは誰が首を。ハテ誰で有う二條の后高子の君。ヤ。后様を討つ程なれば思案も談合

も何も入らぬ。井筒を主と立つる上は自らも主は主。云付くる詞を背き何故井筒を討つまいとは。なんほう主でも。邪僻事は云はせぬが家老の役。ヤそちが夫が家老なれば。自らが兄民部太郎も家老職。家老が止めうと誰が止めうと。娘は母のまゝ井筒が首討つて。后の身代りに立て、見せうと首桶に取付ぐを。紅梅突退け肘を張つて涙を浮かめ。左程迄姉様殺したいかいの。エ、ほんに。人の議論いひたうは無けれど。心と素性を顯すの。名を昆陽野というて。腹に宿した妹子にさへ様を付けたは。まだ十年にならぬぞや。先御前様の御病中お髪おろされ。其の身は佛の姿と成り其方を北の方と定め。まだ振袖の人を井筒様のお袋と。親子の盃させられ。外様侍の兄を引上げ。お家重代の桂金吾と肩を並ぶる家老職。兄弟共に御家中の上下様にさまを付け。敬ふ様になされた御前様のお心は。井筒様を大事にかけさせたいばかり。思ひ

出ずも涙がこぼる、
 微塵程御恩を思ひ
 義理を知らば。空事
 にも殺さうとは云は
 れぬ所。是を序に繼
 子をしてやらうでな
 ア。繼母根性。思
 知らずの成上り。井
 筒様殺すをまだく
 と見ては居ぬ。地そ
 れより先に后のお首
 此の器物へ入れて見
 せう。系圖有る侍の
 女房の手ばしきい働
 見ておきや。系圖
 圖々々と喧しい。我
 我兄弟氏も無い成上
 りとは。おぬしが調
 べいでも知られた事
 。少しも隠さぬ。是を



序に繼子殺す思案とは。系圖有る侍の奥様には似合はぬ憎體にくてい。
 雜言ざごんといふ物。繼子惡むか惡まぬか。
 日頃の仕方明いた眼にかゝらぬは其方が盲よ。我が身を賢女よ貞女よと云はれんためむざくと。二條の后を殺し紀の有常は不忠の臣。腰拔よ道知らずと一天下の管を請け。萬劫末代家の氏を。汚すと知らぬ家老殿。ま、母でも繼母でも母は母。娘井筒が首討つて后を助け。殿のお心碎かれし隠謎かくめ。さ



殿の御状使の口上。御兩人の諍ひの次第一

一に承る。是紅梅悪い呑込み。后を討つ程

なれば。當春より殿の百千に。御心碎かれ

し御苦勞。我々神々の御代參も何の徒事。

地代りに立つ井筒の姫。男なれば晴軍の討

死同然。末世迄の譽。討つ我等は忠節首桶

是へと引つたくる。舞いややらぬ。さ程思

は。金吾を待つて何故兩家老相談せぬ。い

やさ曉迄と時を切りし手詰の設議。此の短

夜にうつかりと。何時歸るも知れぬ金吾を

待ち。談合評定に刻限違うての難儀は何と。

イヤ兄弟ばかり願き合ひ大事の姫君失ひ。

殿様のおとがめに返答は。ヲ、其の返答に

は此の俊綱が腹々。そなたが腹何萬何千切

つても姫君は歸らぬ。地一足もやらぬと反

をかへし取付けば引放し。突放しても押の

けても縋り纏うて動かせず。扱聞分けなし

是非もなしと取つて捻伏せ。刀振捨て腰に

付けたる股立紐。細腕後に用捨もなくぐッ

くと。前むるも弱き若楓の下枝にしつか

と縛付け。もはや邪魔はなし北の方いざ御

座れと。兄弟打連れ石段に登る夜半の月か

けも。フシ山の端遠く晴れ渡る。地紅梅叶は

ぬ身節をもみ。舞ヤレ猿はまだしも。致ふれ

ば犬も藝をする。此の年月歴々の侍を見習

ひ。腹を切るの忠義のといふ詞は覺えて

も。犬の藝と同じこと。心がもとの畜生。

忠義といひなし繼子を殺し。妹御に威を付

けお袋伯父御と仰がれ。御家中を下に敷く

べしとの慾心。揃ひも揃ひし兄弟。地佛

神もいつその事畜生並に思召し。罰も當て

給はぬを己れが徳と思ふかあさましや。金

吾殿は何してぞまだ下向ない事か。觀音様

もつれない姫君殺すをきよろりと見て。地

柳鐵の鎖も切れちぎる。との經文は偽か。

此の組繩一筋切れぬか解けぬか。エ、無念

やと跳りあがり泣叫びしやくればしまる縛

繩。涙干濁の捨小舟。フシ引くにかひこそ

なかりけれ。地桂の金吾廣國戻りかけ聞き

かけ。直に馳着き泊瀬の山。脇目振らねば

それとも見ず。紅梅が側をつつと行抜け。

坂口にかゝる後姿なう金吾殿。地遅いく

はや北の方兄弟が。我を爰に縛り付け。井

筒殿殺しに行たわいの。地かういふ間もあ

ぶない早うくと身をもめは南無三寶。地

エ、く遅かりしと齒嚙をなし解いてくれ

たき縛繩。一寸の間も氣遣はしく見捨て、

上がる坂の上。地民部太郎首桶抱へおり來

る。金吾坂口に踏踏り閻魔王の怒れる顔色。

舞ヤイ脚洗ひ侍の馬鹿者。後の代りに井筒

御前を討つと聞きしがはや討つたか。民部

ぐつとせき上げ。ヲ、井筒御前をたつた今

討つてまだ温かな首。此の器物に有りとい

はせもたてず。地主の敵通さぬとすはと抜

いて民部が太股。六寸許り切込んで二の太

刀上ぐる其の隙に。金吾が鬚先耳の根かけ

て抜打に切付けられ。後飛に一丈餘りぞし

さつたり。續いてひらりと飛下り疊み掛け

て打つ刀。此方兩手のまくり切片手業に請

けかね。草に首桶隠さんと立寄る所を拜打。

■民部が肩口ざんぶと切られうんとつけ欄より。見れば血刀月に閃き兩相手朱に染みに。反しながら。横に薙ぐる切先金吾が膝節み。身も紅梅が縛られながら。有様怖やなうと二條の後。驚き給ふ御聲下にも驚き見上ぐる顔。井筒能く見下し。方深手よめきながらフシ氣は鐵石と打合つたり。地紅梅も心ばかり眼ばかりに網の鳥。繋ける犬のいがむが如く。エ、無念なそれくそこをふん込んで。ア、此の繩切つてほしいな甌出でん。くと騒げばも騒ぎ。數ヶ所の疵より走る血はフシた。騒ぐ棺木の葉がざはく。夫は繩を切捨てん民部は女を胴切と。よろほひ寄りて瀧津瀨の如くなり。地井筒堪へかね后諸共一度にはたと討つ刀。結目の下を八寸許り走り下り。あわてふためき繩解き給へば。金吾猶も怪しみみざり寄り首桶開き。能くすつばと切つてぞ落しける。地二人は深手見れば北の方。ハアウ。地是はとばかり井に身も紅。女の足は働けども繩に付きたる筒の姫。母上を何故切つた何科に殺した。大枝に。釣引れ枷と成り。刀は業物手は利生けて返せはや返せと繩り給へば人々も。いつ命限り息限り。谷に落ちては這上り坂悲しとも痛はしとも辨へ涙一時に。ステ泣に登れば轉び落ち。一所に集り三所に別れ。叫ぶこそ道理なれ。民部恨めしげにきつと廣大慈悲の御法の山。忽ち墮落金剛山修羅見て。何と金吾。足洗侍成上者の手際をの岐ぞ。三重。恐ろしき。釣音足音叫ぶ聲。見たか。最前より紅梅が是非に后を討つと更くる夜の風の木魂内陣に聞ゆれば。后もひしめき。御分我に討ちかくる。扱は彼奴人。是程思ひ定めし身が何面目に存らへ。

此の黛がおめくともそも洗ひ捨てたりよか
拭ひ落さりよか。黛は洗ひはがすとも死に
ぞこなひの生恥。此の世では雪がれず夫の
手にもかゝるまじ。民部殿手につけ同じ及
に北の方。冥途のお供と縋り付き絶入る許
りに見えければ。后も井筒も諸共に。扱は
我故自ら故と。あへなき首の髪を撫で顔を
撫で聲も。惜しまず泣き給ふ。民部が顔
の血と涙。眞紅の絲と白絲と亂しかけたる
如くにて。調エ、口惜しや。男も女も世の
中の。人に交らふ程ならば氏系圖は欲しき
物。人に蔑み疑はるゝも生れ素性のさもし
き故。地悔るより疑はる悔るも道理。調昨
日今日迄お供先に手を振りし。素足跣の徒
歩奉公其の妹の北の方。さこそ最期も見苦
しく。民部がおさへてかき首になしつら
んと。人の疑恥かしや。兄弟氣はせく内陣
へ聞かせじと。あの松蔭の芝の上我を招き。
せめて一遍の念佛一偈の經も讀む間なく。
科人よりあさましく草村に座を占め。民部
殿さあ只今。若草が生先姉姪に頼み下され
と。最期の一句是ばかり。地首差伸べし顔
ばせは。如何なる先祖筋目正しき人々にも。
ステテ劣るまじと思へども。調檜の木作りの
名作の佛より。佛師の刻みし伽羅の佛は。
人尊み重寶す。地利益利生は勝れても。伽
羅といふ氏系圖に佛の力も敵はばこそ。況
して凡夫の今更産付けし親も變へられず。
北の方の未來迄歎は是一つ。哀と思へ金吾
とて。ステテ膝にもたれくどき泣く。地金吾
も共に伏沈み。氏系圖はともあれさすが高
冢の北の方調上に立つ身の御器量。代々の
執權なれど下に附く身の習はし。其の程々
の願れて。地底深き御心の水智慧の釣瓶の
短くて。汲取らざりしフシ恥かしさよ。地天
が下の女の司女御后に成り代りたる北の
方。是に上越す系圖もなし。民部悔むな泣
くなくといひつゝ泣く。ヲ、それく自
らが名と命に代る上からは。官も位階も其
の名に添ひ。中納言藤原の長良が娘。清和
天皇の女御。二條の後高子の君は此の人。
今日より我はたゞうどと忝くも御后。首の
前に御手をつき傾くおぐしはらくと。御
涙にくれ給へば人々わつと聲を上げ。生れ
ての譽死しての果報。此の上の有るべきか
同じくは今のお詞を。最期の耳へ聞かせな
ば未來の悦びフシ如何ばかりいたはし。さ
よと悶え伏し。地歎きの中に後夜の鐘無常の
響數添ひて。フシいと哀ぞ増りける。調南
無三寶五更の鐘金吾聞いてか。實にもく。
時刻過ぎては皆徒事我々深手は隱密。御首
は女房渡せ。敏に色ばし覺られぬ。地急け
くと勇められ力なくく紅梅が。器取繕
ひ涙の袖に携へて。我は歸れど亡き人は中
有の道に出て行く。野邊の送りの門火たく
澤の螢とあこがれて。もう會ふことは叶は
ぬか此の世の名残今一度。お顔が見たい見
せてたべ。暫くなうと魂よばひ呼ばれて暫
し立ちとまり。明けて見せたる佛頭わつと
叫ぶを一生の。夢よ現ようつはもの二目と

だにも短夜の。涙な添へそほとゝぎす。鳴くや五月の花菫薄似たりや。似たりかきつばたの謎も開くる後の世の。迷ひ開くるほのく明け別れて。館に歸りけり。

第四

唐衣きつゝなれにし妻しあれば。在所住居も珍しく高安の老母侍氣。業平を聲かねと君をかしづき奉れば。とりぶき屋根の雨よりも人目もらぬを頼みにて。忍びて皇居をフシ安んぜらる。地般若五郎仲則世上の安否聞かため。忍び編笠の路地の戸けはしく敲く音。業平驚き走り出で誰をともいはせず明けたく。晝中に門しめて世を忍ぶ段でなし。大事が出来たとつつと入り。京都の體を窺はんと。淀一口邊迄参りしに。あのあたりの取沙汰。有常殿より二條の後を討つて出され。敵の郎等丹内兵衛首を請取り歸京。人足よ傳馬よと大和路の騒ぎ十日餘り。以前の事と慥に聞届け候と。語ればはつと詞もなく。地假の住居の障子一重

天皇まろび出で給ひ。死なばやとのみ論言にて。ステ歎き沈ませ給ひしが。地外面に音なふ女の聲。調部よりお出でなされし公家様方のお宿はと。地市女笠きて二人連。窺くを見れば金吾が妻の紅梅。あれ業平様

后御供致せしと。申せば君も御夢心地。懐しやゆかしやはへくはやくと。御衣に縋り袂を控へ。悲みの涙時の間にフシ嬉し涙と變りけり。地紅梅御側近く参り。此の度敵の難題民部金吾が間違にて。手を負ひし忠心北の方の身代り。末代の賢女烈女とも。同じ女と生れても我々及ばぬ事ながら。地下が下迄君に命を惜まぬは。御連開くる瑞相と。始終をこまんと奏すれば。君を始め業平も有常一家の忠節。道と義とに命を捨てし北の方武士にもまさる女ぞと。御涙せきあへねば物に動ぜぬ般若五郎もステ聲を。上げてぞ泣きわたる。地御落涙の隙よりも如何に業平。地臣憂ふる時は君共に憂ふと云へり。地況んや皆朕故汝只今大和

に越え。有常が喪を弔ひ臥重祚せば。北の方に位を贈るべき旨云ひ慰め。且は井筒もなつかしく朕をがな恨むべき。紅梅連立ちはや急げと。後の御手を取交はしッ奥の。一間に入御なれば。地紅梅手を打ちア、上は上程お情深し。井筒様は御ことのみ。折しも雨續き故かお庭の藤山吹。春よりましに咲亂れしを御覽有り。時ならねど庭の松

には花咲けども。井筒が心の松には花も咲かぬとのお悔み。さぞお悦びサアお供と勸むれば。尤々勅詔の上延引ならず。調是仲則心を付けて宿直致せ。地生駒の姫は父が命日とて聖徳太子へ参詣す。戻らばかくといひ聞かせよ。如何なく存じもよらず。常々あの格氣深さ。井戸の端の童より井筒の端の業平。あふないくゝと寢言にも格氣する人。あたゝかに合點致されまい。地精ヲ思案こそあれ何時も神事にこもれば。地進深齋にて五日三日女に面を合はせねば。生駒も合點俄に神事とだませだませ。地今

にも歸ればやかましし。道の用意も此のま
まいざ紅梅と、フシ打連れ急ぎ出で給ふ。圓
エ、迷惑千萬帝の守護より愔氣の用心。小
むつかしい留守居やと。呟き、掛金しめ。
フシ障子引立て入りにけり。フシ姫も程なく。
立歸り。圓申し業平様。たつた今下向致せし
と。路地の戸叩くに音もせず。業平様。
中將様。生駒が下向しましたと叩いつ窺い
つ是は扱。圓心得ぬ一足も外へお出でなさ
るゝ所もなしと。喚き叩けば打割る許り。
仲則心得淨衣に烏帽子。御幣捧けて後向き
はしく聞かせて。高天が原に神の留守居
仕る。千早振る。千早振る。フシ御
幣振る。地姫さし窺いてヤア。又例の御神
事かと。呼ばれば内に頷く。圓いや俄の神
事何の爲ぞ。よし御神事でも垣越は大事な
事。此處へ来て顔見せ給へと呼ばはれば
いやぢやと頭振る。圓何ぢや否ぢや。さ程
俄にいやになる筈がないと。叩く響に掛金
はづれ。扉くわつと開けたり直に駈入り

鳥帽子かなぐり引廻せば般若五郎。扱こそ
な。いけまちくと。業平様は何處へぞと
睨み付くる顔。一生怖い目知らぬ身も。が
ちくふるひどまくれ。圓中將殿は大和の
井筒。何ぢや井筒。いや井筒屋の神事で祭
に呼ばれ。爰は跡の祭ぢやと云捨て。フシ逃
けて駈入りけり。地姫はこらへすわつと泣
き。エ、恨めしやつれなや。片時半時油断
せず守りつめしもの。今日は何とらうたへ
て取放せし。元より及ばぬ雲の上人。思ひ
そめしは身の因果。とは云ひながら。フシ妹
背の縁。天上の桂男といとさかはいさ。
外の女にお顔見せるもいや。況し
て井筒が我が殿顔憎や腹立ちや。假睡の夢
にも若し井筒奴が見ゆるかと。寝た間も悋
氣晴れぬもの。行く男も行く男。今頃は行
着いて二人寝たか。積る睦事我がせしがご
とエ、く頬憎や妬ましやと。立つて見居
て見齒を鳴らしかつばと臥して。歎きしが。

死ね。追ひかけ行かん連歸らん。心輕しと
笑はゞ笑へ。コハリ狂女とも云へ心に連れ立
つ男出立の姿は是ぞと引き被ぎ。結ぶ鳥帽
子の紐さへ指に。フシ付きまとはつては。離
れじのかじと夫の淨衣を身に引き重ねる花
すり衣。色も嫉妬にまよひの煙。くらむ眼
に涙の霰はらく。腹立ち燃え立つ龍
田越跡をした。うて。三重へ追うて行く。フシ
足引の。地大和の國石上。紀の有常の奥庭
に。スエテ五月雨晴るゝ南影。天地の氣應じ
てや。再び咲ける木々の花青葉が中の梅櫻。
紫寄する藤波の。洗へば松の翠添ふ。八重
山吹も口なし色に。オオトラ春とはいはで彌生
山鶯ならぬ彈の聲。扱こそ夏とは。フシ知ら
れけれ。有常易々敵を欺き館に歸り。北の
方の菩提の爲御經書寫し讀誦して。咲出づ
る花を亡き人の手向草ぞと觀念し。スエテ涙
先立つ折ふしに。業平の中將殿紅梅が同道
と。伴ひ出づれば髯鬚顔見合はする目二涙。
是へくと讀ぜらる稍ありて業平。圓今度

北の御方一命を以て後の御難を救はれし段。繼子井筒に對しては仁愛有り古今の忠死。君御感涙淺からず。二度御位に立歸らせ給はば。女官を贈り給はるべしとの叡慮なりと述べ給へば。有常烏帽子を地に着け。

御君恥かしめらる時は臣死すと云へり。君の爲に命を殞すこと。和漢其の例珍しからず。然るに贈官有るべきとの旨。昔の下なる白骨も如何ばかりの悦び。子々孫々の面目此の上や候べき。御御覽の如く庭前に時ならぬ。草木の花二度春を見せしこと。

往昔春日山冬の日に藤咲きて。朝家の吉事たりし古例。聖運開くる瑞相。我々が歎をとめ上を壽き奉れと。死したる女が心の花咲き顯しと一入の悦び。御目度度く奏聞し給へ。娘井筒も繼母が歎今にやまず。

夫婦の對面には愛を忘るゝ習ひなり。夜すがら語りいさめてたべ。いざ此方へと打連れて。オトリ奥の一間に入り給ふ。せき立つ足は。地に着かず。地空をも駈ける生

駒の姫。井筒御前の寢所の裏門。走り着くやら叩くやら頼みましょ。スエテ誰ぞ頼まんと呼ばるゝ。廊下を通ふ婢女の。ア、せはしない誰ぞいのと簀戸を開けば。ヤ苦しからず業平の中將といふ者。にちよつと逢ひたしとつと入るを待ちや

く。御中將様は夙うにお越しなされ。お寢間で井筒様としつほりのどうぶくら。何ぢや業平の中將。事觸の様な姿をしてすりかかたりか。戸はたと閉め。なう怖やと

無理に内へ入らうでない。ちよつと爰へ業平様呼び出す事も叶はぬか。地今しつほりの最中とは未だ日も暮れぬに餘りな。見ともない聞きともない。爰から喚くが聞えぬか。隠笠かな。小面憎い。目見て。エ、引きのけたいと打叩く戸は割れもせて。心を碎き身を焦す日影は山に目は涙。暮れ行く夏の宵闇の。空には降らぬ

五月雨我が身一つぞ。フシしをれける。節伯父の大炊之介業平來ると聞付け。つげ廻したる頬被心しめたる高からけ。足音靜に忍び込み。互の心の暗闇に振り返り見る烏帽子姿。業平ごさんなれしてやつたりと詞もかけず戻り足。生駒姫が右手の肩先は

るを。追つかけすかさず井戸の井桁に取つて振ち付け。肝のたばねを南無阿彌陀十萬億土を一刀に。ぐつと扶る刃を掴み。扱は井筒めが云ひ付けて殺さすな。エ、むごいぞやつらいぞや。妬は互のことながら殺さうと迄は思はぬもの。ア、苦しい此の恨及物ばかりが命はとらぬ。干將莫邪の劍より生駒が今の怨念。取殺さいで置くものか。

思ひ知れやと念のはたき。フシ涙は車軸雨やさめ。生駒と聞くより大炊之介はつと驚き氣おくれして。手足がたがたつく膝踏みしめく。調ヲ、よい推量殺せとは

416

井筒が云ひ付け。地井筒につけと刺通す無
慚の切先邪険の刃。三途の川瀬水の泡終に
はかなき死骸を直に。よい埋穴と井戸へす
つぶりすぶくく。サアしてやつた。此
の勢に業平をと奥を目掛け駈出でしが南無
三寶人が来る。よし今夜の中は過ごさじと。
縁の下より高道し。フシ奥深くこそ入りたり
けれ。フシ手燭捧けて。業平の歸るさ送る女
房達。中將様のお歸りお供の衆。親子御様
より御念入此方よりお奥にて。送らせませ
との御事と申し上ぐれば。調子、井筒もさ
はいひつれど。君さへ世の中忍びの御身時
相應の歩はだし。供の童を垣の外面に待た
せ置く。地さらばくくと立別れ竈戸押開き
立ち出で給ふが。又立止まり。調子、心得
ぬ井筒が今宵の有様かな。河内の女と我が
中を知ればこそ問ひつるに。地妬ましけな
る顔もせずたまく透ふ夜の今の別れ。ま
だ夜深きに又いつかはと色濃く止むる詞も
なく。夜嵐はけしお風召すなとばかりに。

につこと笑ひし別れ路は疑もなく又踏分く
る忍び路に。通ひ男のあるよな。河内へい
ぬる顔にて井筒が有様窺はんと。獨り頷く
薄原薄よりなほ身を細め。露深草のかた鴨
フシ妻ゆゑ佗びておはします。かくとは知
らず井筒姫。相見る程は稻妻の。長地顔さへ
見せぬあだ人を跡には枕ばかりにて。寝る
に寝られず閨を出で。エテ其方の空よと打
眺め。地爰より河内の高安へは。生駒の嶺
を打過ぎて大道越や龍田の山。ア、すさま
じき悪所の有りと聞くものを。覺束なくも
夜の道。フシとやあらんかくや。渡らせ給ふ
らん。心許なや氣遣はしア、儘ならば行て
見たやと。一首の歌にかくばかり風吹かば
沖津白波龍田山。夜半にや君が獨行くらん。

おまへは誰ぞ御本妻。生駒はいはせてかけ
者一口にいはいはれぬお身。折角お供致せしも
の。夜も晝も抱きしめとめて置けばとて何
の恥辱。地御機嫌ようにつこりと笑顔して
お暇乞。エ、はがいやと身をもめば。なう
別れ路に笑ひしは。泣くよりもフシ猶苦し。
情氣嫉妬は女の瑕。調子夫にあかる、始ぞと
母上の教訓一大事と嗜み。地思ひ殺し思ひ
消し思ひ紛らし鎮めても。胸くるしむる妬
ましや振分髪の頃よりも井筒に。丈を比べ
來し。互に影を水鏡。美しい殿よい娘と相
思ひに思はれて。たまく夫婦になりし中、
生駒の姫に見替へられ。てかけが本妻の情
氣とは神代も聞かすあることか。是も男の
あだし心苦しや胸が燃えこがる。是見て
たもと襟くつろけ撫で下す。紅梅が手も火
傷の如くあつや悲しや冷してたもと。水を
提子に汲湛へ。せめて暫しも助かると胸を
さませどなかく提子の水は湯と成つ
て。又つぎかゆれば沸きかへり湯氣はほむ

らと燃え上る。これ見よや鳥の子を十つとまつ十は重ぬとも。思はぬ人に身を焦す心の内の苦みを。思ひやれやとばかりにてわつと叫び伏し給へば。紅梅を始め女房違いとほしの思や痛はしの戀路やと。共にしをるゝ涙の雨ぬれぬ。袂は無かりけり。フン聞くに堪へ兼ね。業平朝臣薄押分け飛んで出で。聞なう恥かしや思ふに違ふ井筒の心。悟氣すべきを妬まぬは外に心も有ると疑ひ。高安へ歸るふりにも



てなし。隠れて事を聞きたるぞや。今今
 の詠歌の肝にしみ心
 ざしの採、内待所も
 照覽あれ。此の後ふ
 つつり生駒の壺を思
 ひ捨て外心は持つま
 じ。恨を晴れよなう
 井筒と御手をちつと
 しめ給へば。品なく
 ひんと振放し。スエテ
 拂へばすがり抱き付
 き。今迄妬の積る雪
 解けて語らぬ其の内
 は。放すまいぞや放
 さぬぞ。フシならぬ
 ぞ。フシならぬと引
 きとむる。紅梅はづ
 せば女房達あのゝも
 のゝに夜が更ける。



口説はお床でくと無理にお寝間へ押しやれば、いやぢやくと云ひつゝ井筒。心はひつたり業平とオクリ打連れ。寢所に入り給ふ。地既に更け行く遠寺の鐘青葉の風颯颯々。コハリ北斗も建す丑三つの空物凄く前裁の。井桁に猛火燃上り天にははり地にいな光り。土石草木動搖し。生駒の姫のナホス有りつる姿影と。顯れ三重ウタと往事渺茫として夢に似たり。人生寂然として泉に歸す。是を現といはんとすれば。武帝の漢女を慕ひし煙。幻と見れば曹公が淵を求めし父の骸。皆一心に寄るとかや。

怨靈振分髪

歌筒井筒。井筒の水は。濁らねど。かはせし。人は臙月入方。もなき我が思ひ。唯變らじと。一筋に。寢ても覺めてもいとしさの。あまりてもれてにくう成る。君と我とは戀仲なれど。にくや井筒がナホス水さして。あだに破りし。戀衣。肌は非道の刃に刺され一つ世にさへ。二世の縁。泡と消

えゆく三ッ瀬川。胸に。渦巻く。戀慕の岩波噴志にせき入り思ひに淀み。流れずとまつて沈む體も盡きぬ妬みも共に井筒の。底に焦がる。フン恨みの數も。絶えせめや。思ひ出づればなつかしや。君に逢ふ夜は天の戸のあくるを恨み語らひし。今は無間の釜の蓋オクリあくるを。待つにかひもなく。燃え立つ紅や緋縮緬綾や綸子の下紐は。腰にからまく我が絆撫でて。おそろくろ髪。おもかけ。の。朝夕向ふ丸鏡。冥途に是を淨瑠璃や。紅や白粉溶きみがき。光を見れば劍の枝。山と讀む迄身に積る。妄執の雪無明の蔽。あら腹立ちや。フシ妬ましや。フシ圍ふ屏風の。打解けて。井筒がまゝに業平の。ステテ問ひてかけたる常陸帯。あつかは女の二重三重。帯は解くとも心とかせじ。ワキ添はせじ。寝させじ共に。二入奈落の憂き目を見せん。來れ井筒と怒の息つき。フシ焔と成つて飛入れば。帯は浮立つ雲の波締め合ふ肌を離れつゝ。引かれて井筒は帯に取付き

スリ迎り來るく。時離れし比翼の鳥の片翼。仇と情の思ひ羽劍羽皆。愛著の矢先と成り悉く身にたつか弓。引かる。苦患は添臥しの。ナホス圍に茂りし戀草を汝が時きし種ぞとは。ハツミ思ひ。知らずや扱懲りよ。歌比は睦月の末つ方。よしなき縁を組みそめて。いとし可愛いに。からまされ爰迄。跡を追うて來て終に劍に置く霜の。消えしも井筒故ぞかし。君と寢初めて一夜さら獨りは見せぬ閨の月。二つ二人が。顔を並べて。三つ見れども。四つよしなや。なつかしや。五つ井筒に。見かへられつゝ六つ昔の。馴染もどして。七つ泣いても。八つ九つ今宵は君が。どうで歸らじ戀しなつかし。うそつく鐘の。十一十二。十三峠背に越えしが此の世の名残。此の。一念は附添ひてのかじ離れじ影身に纏ひ。くるくく。苦しき胸のほむらの火に。五體をこがせば井筒姫。追ひは。れんと断出し櫻の木かけに隠るれば。響を取つて引戻し。もとより色有る花

の顔。情の櫻散りもせて花の木蔭に隠るゝ
は。姿は櫻の色添へて オクリうつろふ。人
に思はれんと。スエテ其の花心恨有り。見る
も餘所目の妬ましきに。花のうはなりこれ
見よと。櫻の下枝筈と振上げ追立て。ほつ
立て、フシ追廻し。彼岸櫻の雪と散れ。煙と
なれや鹽笠櫻。汝に恨八重一重。フシ今日
九重の遅櫻。君に先立つ初櫻名残も跡に有
明櫻シテ打つとも去らじ。ワキ退くまじ家の
二入フシ犬櫻。因果の焰火櫻のコハリ花も命も
盛り一時根にかへれと。いがみかゝれば井
筒姫。逃ぐるに途方なくくも命を繋ぐ藤
かづら。松に ナホスまとふを力にて オクリ漸
う。梢に、フシ這上れば。地何處迄もと呼は
はつて虚空を睨み大地を蹴立て。コハリ松の
古木に寄るよと見えし甘毒餘りの縹の帯。
頭は忿怒の鬼女と成り。角を振立て梢を轟
ひ花を吹巻くはやち風。砂を飛ばす土煙
猛火を吹掛け井筒を目懸け。梢遙に、ナホス
追ひのほすはすさまじかりける。三入ハ勢ひ
なり。地井筒は楯に目眩き。枝も撓つて氣
も絶えん。死ぬとも颯にかゝらじと枝を
離れて真逆様。大地へかつばと飛下るれば。
所こそあれおのが名の下は井筒の眞中へッ
ンそこはかとなく陥りたり。地續いて死靈も
をちこちの山嶺俄に震動し大地も。裂くる
ばかりなり。ワキ地音に夢覺め業平朝臣驚き
寢所を躍出で。 井筒姫が見えざるぞ尋ね
よやつと呼ははり給へば。地女房達右往左
往其處よ此處よとひしめく所に シテ井筒の
内より曠志の猛火爰着の水涌立て。火玉水
玉迸れば、ワキ業平御覽じ南無三寶。幻とな
く現となく生駒姫の死靈顯れ出で。井筒を
呵責し苦むると思ひしは。夢にも非ず誠な
り。誰が手にかゝつて果てたるぞ生駒姫に
井筒姫。彼と云ひ是と云ひ。不便の者の身
の果やと スエテ前後もわかず。取亂し、フシ
歎き。沈ませ給ひしが。地假命令は終ると
も互に修羅の絆を離れ。成佛得脱の身とな
れと肌に掛けたる九重の守を。井の内へ投
け給へば。シテ地忽ち水火種に治つて。生駒
姫の化したる姿井筒姫を宙に提げ。スエテ忽
然と顯れ出で。 御守の威徳に祓はれ。妄
執の雲霧霽れ朗に見れば恥かしや。我を討
ちし其の仇は縁有る伯父の大炊之介。それ
とは知らで井筒の姫。憂き目を見せし、フシ
悔しさよ。今こそかへし得さするぞ。死す
るは我が身の薄き縁心直なる井筒姫。露も
残さん恨はなし。ウタヒ此の後又も来るま
じ。再び仇をなすまじき。ナホス地夫を狙ひ
我が身を殺し。重ねんくの大悪人來れと呼
ばはる聲につれ、ワキ手足を張つて大炊之介
なう堪難やと狂出で。大地を掴み苦めば
シテおのれが邪険の刃にかゝり。沈みし井筒
の溜水。底に沈んで幾奈落奈落の底の憂き
目を見よと。取つて引寄せ真逆様。今こそ
恨は晴れたり。云ふ聲ばかり、フシ跡に。
残して明くる夜も、ハルシ東雲近き。八聲の
鳥空白々とさはりも晴れ。二入上中下に至る
迄さゝめき。喜び繰返す。井筒の掛繩末永

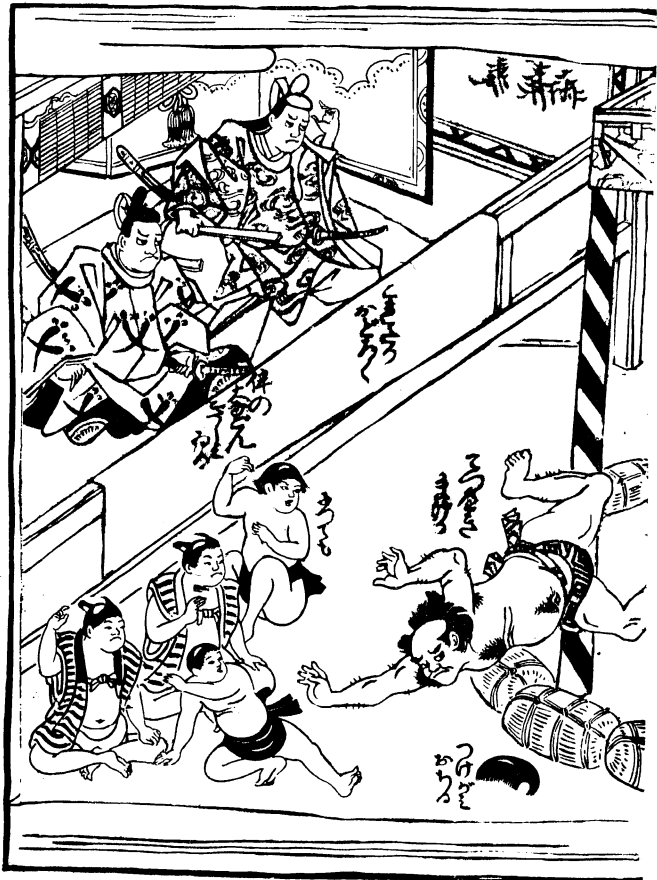
くしつほり。く床
 のうちとけ御語らひ
 契も深き妹脊の水淺
 から。ざりし縁なり。

第五

地大人は非禮の禮に
 拘らず。かるが故に
 義に因つて其の親し
 きを滅すとかや。扱
 も惟喬親王の賊軍三
 千餘騎。伴の大納言
 宗岡を大將にて。日
 月の旗眞先に押立下
 。大和の國都介野が
 原に陣取つたり。地
 官軍は郷侍。野武士
 を集めて御勢三百餘
 騎。桂金吾民部太郎
 般若五郎三家老。日
 月の御旗を靡かせ。



三千餘騎を引請けて
 鯨の鱗を呑む如く、
 関をつくり貝鉦なら
 し。追つつまくつつ
 かり廻し。もらさず
 残さず 三軍切りま
 くる 三軍半に。
 地春日の社司。あわ
 たしく兩陣の中に
 立ち。詞なうく 雙
 方丹をとめられよ
 、過ぎつる夜大明神
 の夢想の告、神官の
 者ども一同に蒙りし
 返。則ち告文に認め。
 上覽に供へ奉ると。
 地未だ訴へ終らぬ所
 へ。詞伊勢の祭主中
 川三位。是も同じく
 告文を差出し。過ぎ



し七日の夜内宮の御殿鳴動し。皇太神。か
 んなきに乗移らせ給ひ。御託宣の趣此の一
 通に地候とフシ大息ついて述べければ。地
 大納言宗岡在五中將業平朝臣。陣頭に出迎
 ひ二社の訴只ならず。互に拜見有るべしと
 さつと開いて讀み上げたり。詞我が子孫は
 秋津島の主。萬民を苦むる事勿れ。軍をや
 めて神明の直なる心に任せて。天津御位を
 定めよとの神託を。讀みもはるも一同に
 一文一句違ひなく。神と神との和光の詞割
 符を合はする如く。二人もはつと信をなせ
 ば。諸軍勢も恐入りフシ耳を歇そはたて鎮まれり。
地業平朝臣神慮をはかり。なう宗岡殿。御
 連枝御位の争に。科なき人を殺さん事。神
 明歎き思召し戦をやめ。何にても勝負に因
 つて御位を定めよと。神の御告疑ひなし。
地是を思へば軍をとゞめ先例に任せ給ひ。
 春日の神前に於て正直正路に他念なき。十
 歳以下の童に三番一得の相撲を取らせ。勝
 ちたらん御方に御位を定めんと存するが。
詞貴卿は何と思召す。ムウ存分も有るなれ
 ど。神明の告背きがたしともかくも。惟喬
 の御前は宗岡に任せられ。用意あれ業平殿。
地ヲ、其方にも御用意と。別れ分かるゝ旗
 の足。修羅の巻も忽に吹をさ。まりし三重
 神風や。地伊勢春日の神託に任せ。十歳
 未満の童の力有るをすぐり立て。三笠山の
地に勝負の地を占め土俵をつかせ。北は黄
 南は青く東しろ。西紅の緩衣に四本柱を
 よそほひて。錦の水引掛巻くも。西の棧敷
 は惟仁親王御棧敷に入り給へば。紀の有常
業平朝臣兩家の難掌。柱の金吾民部太郎殿
 若五郎を始めとし。御前間近く非常を警め。
東の棧敷は惟喬親王伴の大納言宗岡一類。
 兩親王の御位定め天下分目は今日と。相撲
 を取るも取らざるも。心に我を張る力瘤ちかたヲ
シ睨み合うてぞ並居たる。社僧は誦經し宜
禱が鈴いさめの神樂も事終り。早や西東の
 土俵入り先に歩む行司志賀の兵庫之進。同
木村準人之介年配姿も一樣の。金紋紗の片
 衣まゐ柏の小袴裾くゝみ。團扇携へ御棧敷に一
 禮し。土俵を蔽ひ清めの鹽東西に立別れ。
 相撲の由來を述べにける。詞抑相撲の始め
 と申すは。唐土岩が淵と申す所にじやまん
 がまんがまくとて兄弟三人御座有つた
 り。中にもがまんは力世に越え。我が力の
 程を試しみるに。唐土四百餘州には手に立
 つ者一人もなし。日本に渡り猶も力を試さ
 んと。都七口に相撲取らんと高札を立て。
 廿五間四方に埒を結はせたと承る。不思
 議や夜の間彼の埒を一所鼠が食ひ破る。
 よし〜鼠が食ひ破りし所なれば。此所よ
 り人の出入させんとて鼠木戸と名付け。今
 の世に至つて諸芝居の鼠木戸と申すこと。
地此の時よりもフシ創まれり。又四本柱は。
 須彌の四州多聞持國增長廣目の。フシ四天王
 に象れり。水引は。神明佛陀の戸帳なり土
 俵の敷は十六俵。是十六羅漢に擬へ兩方に
 口を。二つ開けしは阿吽の二字。行司の持
 ちたる此の團扇。日月の形なり。さるによ

つて御相撲は。佛神の内意に叶ひ。勝負に依怙よこごの心あれば。五逆。罪にも。まさるなり。惣じて相撲の御大法ごたほう。様々有りと申せどもあらく、斯くの如く有るぞと聲を。並べて奏しける。調殊更今の相撲正直路の童わらわに。八百萬神やちまうしん乗移り御位定めの時勝負。地心を正して土俵入サア御座れと。左右に團扇差上ぐれば惟番の御方より。コハリ鳥羽の牛松前頭うしむつ。關脇跳岩松せきい之介すしりくと搖ぎ出つ。兜山我慢三郎斯る時節に大關の氣色我慢に練込みたり。劣らず西の片屋より。振分髪の前頭年も八九の節くれ立ち。藪の下の荒虎。負けまじものと子心に關わき返る音羽山瀧之介。大井川の赤太郎は今日の大關と。一朝に選出され何れも三尺。四尺に足らぬ五體六根持ち乍ら。十善萬乘の御位。踏定むべき四股踏む音。手先に振込む力瘤小腕小足の土俵入。三番一得相撃いつせんひきは。いざ御座れ。ナホス地かほすやあといふより兩方に息をつめ固唾かたつよを呑み。眼もふらぬ勝負

の吟味既に。相撲ぞ三五さんごへ始りて。地勝つつ負けつ雙方の勝等分。東西の棧敷氣を張つて次をくくと力む聲々。調末一番は關と關二人の行司左右に別れ。調東西々々東の方は兎山西の方は大井川。此方は大兵彼方は上手。さるによつて今日の大關。此の御相撲が位定め勝負は神の御計らひ。しつほりといざ御座れと。聞く團扇の風より早く。ゑいとはぬればしつとはづし十二の捻り十二の投げ。立かん居かん強みの腰。内掛外掛大わたし囀の羽がへし小鷹の羽折り。猿の一飛夢枕いびりうたせたけ馬さまたがへし。手を碎き心を碎き半時餘り揉合へば。勝負如何と西東棧敷の上下息をつめ。心に立てぬ願もなく手に汗握つて見給へば。兩方互に四つ手に組み。はぶしにどうとまろぶと見えし。調行司聲かけ御相撲見えた勝負ない。相差し相投げとたんのわれ。勝負なしと引分くれば惟番親王大音あけ。今の相撲を勝負なしとは盲目行司奴何を見る。我慢其の風情しほらしくも亦なほフシ危しや。思ひが三郎が仕懸けの勝七分の勝に極つた。地位に即くは此の惟番くつともぬかさば踏殺すと。くわつと眼を見開いて筋骨いら、け罵れば。各太刀に手をかけ一度にはらりと膝立て直す。般若五郎ちつとも臆せず。調相撲の勝負は行司次第。二人かわれと見極めれば相撲は何時迄も勝負なし。目玉に恐れて云ふことを云ふまいか。無理を云はば親王とて免しはない。痛切下けんと踊出づれば廣國俊綱。地荒氣は却て神慮の恐れ鎮まれ黙れと制する所に。廣國が一子幸若丸あけて八つのおつほろ髪。二重廻りの下帯に腰を釣らる、裸身を。おめす臆せず土俵の中すなり。くとふり込んで。調なま中せり合ひむさいく。五人が十人でも相手はきはらぬ。おれが獨りでひらひを取る地御座れくと。フシ突立つて。地踏みの足のうら若く櫻の梢の春の雪。さはらばおちん

けなく有常業平大事の勝負こはものく
と。身を縮め給へば父の金吾は身を冷し。

よし負けたらばそれ迄八方切死と心は我が
子に飛び入る力。相手は進んで名乗を上げ。
掴みひしがん氣色にもちつとも恐れず立並
べば。西の棧敷上中下以前百倍氣を苦め。

土俵間近く詰掛けく。またまきもせず三
見見る内に。地云ひし詞に違ひなくひら
ひ三番續け勝。すは御位は惟仁親王萬々歳
と祝すれば。惟喬親王地踏躑躅みてせき狂

ひ。御ヤア聞きたくもない萬々歳。そつち
は新手此方は疲れ相撲。今の三番勝負無い。
此方からも新手を出さう改めて取り直せ。

地それ鐵壁と呼はれば兼て用意や有りつ
らん丈拔群に夜叉の如く三十餘りの丸額。
どさりくくと揺りかけて練込む臍骨腕骨

は。岩を削つて付けたる如く如何なる相手
がかゝるとも。フシたまるべしとは見えざ

りけり。廣國ぎよつとしコリヤなんぢや。
頭は子供と見ゆれども體は七十の半男。

見すくくの胡亂者倅が相手に存じもよら
ず。外の子供を出されよと云はせもはてず

宗岡。胡亂者とは男と思ふか。親は振金と
いふ相撲取り。當年九つ然も年弱。相手に
せねば相撲に及ばず。惟喬親王を位に即け
るが。二つ一つの返答せいと意地張つたり。

般若五郎踊出で。前髪あればおれも子供。
鐵壁とやら相手にならう。地サア來をれと
土俵の中へにじり込む手を突出して幸若

丸。伯父様。相撲は時の放れ物。子供が大
人に負くるにも極らず。相手きらはぬ鐵壁
御座れくと小手招ぎ。呼ばれてフシすく

む大人氣なさ。惟仁親王有常業平生きた心
もまします。頼みは神力天照兩大神春日。
八幡住吉一心に。惟喬主従しますし顔笑壺

に入つて見給へば。行司の團扇引くより早
くやつと聲掛け手合ひして。はぬればすか

しかゝればもたれ王法守護の神力佛力。幸
若丸が身に加はるとは人も知らず我知ら
ず。大の男を惱ます事牛に食付く蛇の如く。

鐵壁が指込む小腕取つてくるくく。く
るりくと。三見引廻す。地拍子につれて
鐵壁が。前髪鬘すつほり落ち。練鬘奴の剃

立頭そりやくそ化が露れし。掴み殺せ振ち
殺せと金吾民部般若五郎一度にはらりと取
廻し。引放さんともがけども幸若かつて動
かせず。御父様男でも大事な。地鬼でも

蛇でもやるものかと。大の男の前ほろ掴み
目より高くぐつと差上げ。見たかくくと二
三遍土俵の中を持つて廻り。どうと抛出す

其の響。三笠の山に木魂して皮肉も裂けて
亂れ骨。浮世の夢の破れ笠棧敷群衆もさざ
めいて。西が勝つたと喚く聲。フシ暫しは鳴

も鎮まらず。惟喬宗岡に目くばせし。勝負
はともあれ四海の主は惟喬親王。者ども出
あへと呼ばれば隠れ居たる軍兵ども。喚

叫んで切つて掛れば三人も渡し合ふ。般若
五郎が例の得物。土俵の柱これ幸いやう

んと引抜いて。當る者を幸に徹塵になれと
三見打ちひしぐ。地宗岡も敵はじと逃出づ

るを般若五郎。どうど引つしき首ふいやつ
と引抜く所へ。金吾民部惟喬に繩をかけ。
朝敵滅亡御代萬歳と呼ははつて。再び遷幸
ましくして治まる空に出づる日の。清く和
らぐ大日本五日の雨に寶を降らし。十日の
風に悪魔を拂ひ大地に金の花咲けば。海よ
り無量の珠玉を捧げ。上一人より下萬民。
福德壽命に飽き満ちて何暗からぬ君が代の
下に。住むこそ樂しけれ。

七行大字直の正本とあざむく類板世に有といへども又う
つしなる故節章の長短墨譜の甲乙上下あやまり甚すくな
からず三寫烏焉馬なれば文字にも又遺失多かるべし全く
予が直之正本にあらず故に今此本は山本九右衛門治重
新に七行大字の板を彫て直の正本のしるしを糺せよとの
求にしたがひ予が印判を加ふる所左のごとし

竹 本 筑 後 椽

本竹

教博

大阪高麗橋壹丁目 正本屋

山 本 九 兵 衛 版 (邊印)

山 本 九 右 衛 門 板 印